

Title	清輔本古今集資料の一、二について
Sub Title	Study of Materials with Relevance to Fujiwara Kiyosuke's Kokinshu
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2002
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.37 (2002.) ,p.83- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20020000-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

清輔本古今集資料の一、二について

川上新一郎

清輔本古今集の諸本とその異同については、既に拙著に述べたところであるが、その後、一、二の資料を偶目することが出来た。今回はそれらについて考察したい。

一、家蔵零本

近時家蔵となった『古今和詞集』は文久四年（一八六四）の謄写本で仮名序及び巻一―三のみの零本であるが、保元二年清輔本の一本と推定され、既知の伝本の転写本でないことから、独立して考察する必要がある。

家蔵本

存仮名序、巻一―三

文久四年（一八六四）謄写

一冊

袋綴。茶色地藍色文様散表紙（二六・九×一八・四糎）。外題、左肩打付書「古今和歌集夏序春零」。料紙、薄葉紙。透写用のごく薄い料紙の裏写りを防止するため、同じ料紙を一片ずつ袋の芯に綴入れている。墨付、四四丁。遊紙なし。字面高さ、約一六・〇糎（歌本文、頭脚に勸物書入れ）。每半葉十行書。和歌二行書。平仮名交り。内題、「古今和詞集卷第一（一―三）」、部立は内題の下に「春歌上」以下、春和哥下、夏歌とする。

第一丁ウに通宗の識語があり、

以^二貫之自筆本^一書写古今也／件本ハ於^二皇太后宮^一焼失畢云

と／＼和哥等不_レ似_二餘本_一、其説頗違矣

通宗

とし、二丁才より仮名序にはいる（句読点、返点を私に付す。以下同じ）。

清輔本の特徴である頭脚の勘物を有するが、全巻墨筆のみであり、朱書の勘物の多くは省略し、一部は墨筆で書写している。他の諸本に見られる新院御本との校異を示す朱傍記や朱の勘物は全くない。また声点もない。『新撰和歌集』入集歌であることを示す歌頭の合点は墨で付されている。

奥書は、終丁ウ左端に

右一卷者能勢賢高所蔵、有_レ故借用／騰_{（ト）}写畢、于_レ時文久久

甲子歲正月

（花押）

とある。

印記、巻頭巻尾に「和学講談所」（長方朱印）。

奥書の花押の人物及び奥書中の「能勢賢高」については知るところがない。また、和学講談所の印との関係も不明である。

なお、挿入された紙片に「枚原新右衛門様／番町須田三十郎内（ちとり？）」の文字があるが、本書との関係の有無は不明である。

本書は薄葉紙による透写本である。透写の技術はさして秀れているとも言いが、忠実に行われているようである。但し、頭脚の勘物については、内容を理解せぬまま細字の字体のみを模しており、他本と比較の上辛うじて判読しうる箇所が少なくない。また、新院御本との校異や頭脚注の朱書をほとんど欠く点は、底本にすでに欠いていたのか、透写の際省略したのか（この場合、意図的に省略したとも、朱書は後に書入れるつもりでそのままになったとも考えられる）、様々な場合が考えられるが、いずれとも明らかでない。

一方、本書には、墨による傍記本文がまま見られるが、それらはほとんど定家本に一致している。いずれの時にか定家本と校合して書入れたものと思われる。

なお、本書の底本は透写の字配りを見るかぎりでは相当の古写本であることがうかがわれ、鎌倉期の写本かと思われる。

異本歌並びに排列は巻一―三の部分において以下のようになっている。異本歌は片仮名本行で一行書きされ、「見合或本_二有_二此哥_一」などと墨注記するが、他の諸本に存する朱注「無御本」はない。

80ノ次、異本歌あり。歌頭に墨合点を施し、「見_二合或本_一」

有「此哥」と頭注する。

サクラノヤリミヅニチリケルヲ 貫之

ユクミヅニカゼノフキイル、サクラバナキエズナガル、ユキ
カトゾミル

82ノ次、異本歌2あり。合点なく、「或本有「此哥」と頭注
する。

雲林院^ママカリテサクラノチリケルニヨメル

ユキトミテヌレモヤスルトサクラバナチルニタモトラカヅキ
ツルカナ

83 84 85の排列をとる。

以上はいずれも清輔本の特徴に一致しており、巻頭の通宗識
語や頭脚の勘物からも清輔本であることは明白である。さらに、
勘物の内容の検討から保元二年本に属すると推定される。その
一、二を左に掲げる。

まず、各巻巻頭の巻ごとの歌数の表示形式は本書では以下の
ごとくになっている。

卷一

歌六十八と、此中返哥一首

卷二

歌六十六首、其外他本哥二首勘入之、已上貫之哥

卷三巻頭は後述するように底本が補写と見られるので、ここ
では除外する。

以上、巻一、巻二の歌数の表示は保元二年本もしくは仁平四
年本と推定される曼殊院本と一致している。永治二年本である
宮本家本はそれぞれ「春上六十八首」「春下六十六首、但御本
二八十四首也、(以下朱) 此外他本哥二首カキ入ラレタリ」
とあり、頭昭本はそれぞれ「春上六十八首」「春下六十六首、
(以下朱) 此外他本哥二首カキ入ラレタリ(以下墨) 已上貫之
哥」(天理本による、伏見宮本欠)とあっていずれも異ってい
ることがわかる。

さらに、作者勘物の入集歌数の記載方法により弁別する方法
は拙著153頁に述べたが、それを当てはめると以下の通りである。
本書の作者勘物は、初出の箇所¹に付注され、原則として全
ての歌人に入集歌数を記入し、なおかつそれを勘物冒頭に記載し
ている。一方、初期の清輔本と見られる天理図書館片仮名本と
頭昭本は入集歌数を記載しない。静嘉堂寛親本と永治二年本で
ある宮本家本は入集歌数を勘物末尾に記載するが全ての歌人に
わたるわけではない。仁平四年本と見られる曼殊院本は全ての

歌人に記載するが、位置は冒頭、末尾等一定しない。

以上の点を比較すると、本書の作者勸物の記載方法は保元二年本に一致しており、本書を保元二年本の一本と認定して差支えないと考える。³⁾

さて、本書本文の特徴を検討する前に解決すべき問題がある。それは、巻三巻頭内題より二丁分、135―146上句にあたる部分が頭脚の勸物に至るまで全て定家様で書写されていて、その他の部分が例えば為氏筆などと極められそうな字体であるのと字様を異にしている点である。

さらに、本文その他も保元二年清輔本とするには不審な点が多い。そこで、該当部分を左に翻刻する。

古今和詞集卷第三 夏歌

だいしらず よみ人しらず

135 わがやどのいけの藤なみさきにけり／山ほと、ぎすいつかき

なかん

この哥ある人のいはく柿下人麿がなり

う月にさけるさくらをみてよめる

紀としさだ

136 あはれてふことをあまたにやらじとや／春にをくれてひとり
さくらん

だいしらず よみびとしらず

137 五月まつやまほと、ぎすうちはおき／いまもなかなんこぞの
ふるごゑ

伊勢

138 さ月こばなきもふりなんほと、ぎす／まだしきほどのこゑを
きかばや

よみ人しらず

139 さつきまつはなたち花のかをかげば／むかしの人のそでのか
ぞする

140 いつのまにさ月きぬらんあしびきの「やまほと、ぎすいまぞ
なくなる

141 けさなきいまだたびなるほと、ぎす／はなたちばなにやど
はからん

をとほ山をこえける時にほと、ぎすの／なくをき、てよ

める

紀とものり

142 をとは山けさこえくればほと、ぎす／こずゑはるかにいまぞ

なくなる

ほと、ぎすのはじめてなきけるをき、て／よめる

〔せい〕

143 ほと、ぎすはつこゑきけはあぢきなく／ぬしさだまらぬこひ
せらるはた

ならのいそのかみでらにてほと、ぎすの／なくをよめる

144 いそのかみふるきみやこのほと、ぎす／こゑばかりこそむか
しなりけれ

だいしらず

よみびとしらず

145 夏山になくほと、ぎすこ、ろあらば／ものおもふわれにこゑ
なきかせそ

146 ほと、ぎすなく声きけばわかれにし
〔以下146下句次丁初行に連続する〕

〔内題頭注〕

夏哥卅四首

〔135頭注〕

万葉久米広繩哥

ふぢなみのしげりはすぎぬあしびきのやまほと、ぎすなどか
きなかぬ

〔135脚注〕

万葉

あさがすみたなびくのべにあしびきのやまほと、ぎすいつか
きなかん

〔136頭注〕

別

〔137頭注〕

在「猿丸集」

詞云 別

うづきのつごもりにほと、ぎすをまつとてよめる

〔139頭注〕

在「伊勢集」 別

〔143脚注〕

万葉二云

こひしなばこひもしねとやほと、ぎすもの思ふときにきなき
とよます

〔145頭注〕

万葉二云

やまとにはなきてかくらんほと、ぎすながなくごとになきひ

とおもほゆ

まず、古今集本文を検討する。部立を内題下に書く形式は清輔本に一致している。

しかしながら、本文にうつると、清輔本と一致しない点が続く。下のごとくにある。上段が本書、下段が通常の清輔本（尊経閣文庫本による）である。新院御本との校異を示す朱傍記は本書にはないので無視する。

135左注 柿下人麿かなりーかきのもとの人丸かうた也

136詞 さくらをみてよめるーさくらをよめりける

138 またしきほとのーまたしきとときの

140 さつきぬらんーさつき、つらん

141 けささなきーけささなく

144 いそのかみでらにてーいそのかみでらにて

わずか二丁の間に六箇所もあるのは異常である。また、保元二年本以外の清輔本に範囲を広げても、該箇所本文が一致する伝本はほとんどない。わずかに136詞書「よめりける」が天理頭昭本と右衛門切に「よめる」とあるのみである（伏見宮頭昭本は144上句まで落丁）。さらに、六条家本が上記一箇所その他、

138 「またしきほとの」、144詞書「いそのかみでらにて」「ナシ」とあるのが指摘出来るくらいである。

実は本書のこの異同は清輔本諸本に関わるものではなく、定家本であるがゆえの異同である。異同箇所として掲げた箇所はもとより、この二丁の間の本文は定家本に全同である。従ってこの部分は単に底本の筆跡が異なるのみでなく、定家本による補写と言わざるをえない。しかも、内題の書式や一面の行数、和歌を二行書にしてちょうど二丁に収めている点を考慮すると、意図的な操作が行なわれていることになる。

そのような目で見るとこの間（135―146）『新撰和歌集』入集を示す歌頭の合点が一箇所もないのはその故かと納得出来る（保元二年本なら、135 137 138 139 144に付されるのが通例である）。

すると、頭脚の勘物は本来のものではないことになる。案の定、検討すると、保元二年清輔本の勘物としては不審な点が散見される。

まず、内題の頭注「夏哥卅四首」が不審である。保元二年本であるなら「歌卅四首」とあるべきである。「夏哥卅四首」は永治二年本である宮本家本もしくは頭昭本の書式である。

次に、135頭注「万葉久米広繩哥云々」と135脚注「万葉 あさ

がすみ云々」は保元二年本には見えないところで、この勅物を有するのは顕昭本のみである。

以下、順に並べると、136頭注に「別」とのみあり、紀利貞に關する勅物を欠くのも顕昭本に一致し、137頭注において「別」とあるのも顕昭本のみで、「別」の一字が「在猿丸集 詞云」の次に割込むように書かれている字配りまで一致する。139頭注が「在伊勢集 別」と「別」一字があるのも顕昭本のみ（但し、諸本に存する「伊勢語云」以下「伊勢物語」の長文の引用を本書は欠いている）。141において「在伊勢集」の勅物を欠くのは本書と宮本家本と顕昭本のみ。143において「万葉云」の勅物のみで「別」の記載を欠くのは本書のみの異同である。145の勅物は諸本共通である。

以上をまとめると、139 143二箇所において独自の異同があるが、その他は顕昭本の特徴とことごとく一致し、この部分の勅物が顕昭本に発していることは明かである。

こうして二丁分の欠落を別本により補写したことが判明したが、いかなる理由で本文は定家本により、勅物は顕昭本によったのか、その間の事情は不明である。そもそも本文、勅物ともに定家様で書かれている理由も推測し難い。書式を他の部分に

そろえているにもかかわらず、定家様とするのは理解し難い。最初、本文部分を定家筆もしくは定家様の伝本で補写し、次いで、清輔本らしき勅物を有する伝本から勅物を書入れ、その際、本行部分にあわせて勅物も定家様にしたのであろうか。その勅物がたまたま顕昭本だったというのであろうか。ともあれ、本書巻三巻頭二丁は、以上のごとく定家本本文に顕昭本勅物を書入れた補写と認定される。

なお、以上の補写は本書において行われたとも、本書の底本で既にそうなっていたともいずれとも考えられ明らかなでないが、強いて言えば後者の可能性が高いのではあるまいか。

以下に本書の特徴的な異文を掲げる。上段が本書、下段が尊経閣文庫本（清輔本を代表しえない場合は注記する）である。その場合、本書と一致する清輔本がある場合は、本書本文の下、括弧内に略号で示すこととする。なお、本書は新院御本との校異を省略しているので比較の対象は本行のみとする。

仮名序、卷一―三を存する伝本は左のごとくである。

清輔本

永治二年本―宮本家蔵伝二条為氏筆本（宮）

仁平四年本

付、曼殊院藏本（存仮名序、卷一―八、曼）

保元二年本―尊經閣文庫藏伝清輔筆本（尊）、穂久邇文庫

藏伝世尊寺経朝筆本（存仮名序、卷一―十、穂）、金沢文

庫藏本（存卷一、二、金）

顕昭本

宮内庁書陵部藏伏見宮旧藏伝顕昭筆本（伏）、天理図書館

藏伝藤原家隆筆本（天）

仮名序古注 これはもしのかすも（天）―これらはもしのか

すも、同 からうたも（宮「からうたも」のイ）―からのうたも、

同 そへたてまつるうた―そへたてまつれるうた、同古注 こ

のこ、ろえかたし（宮穂）―そのこ、ろえかたし、同 ほにい

たすへきにも（宮穂）―ほにいたすへき（こと墨）にも、同 しきのは

ねかきかそへ―しきのはねかきをかそへ、同 山へのあか人

（穂伏）―山のへのあか人、同古注 むのはな（こと）それともみえず―

むめの花それともみえず、同 いにしへのことを（こと）もしれる人―

いにしへのことをもうたをもしれる人、同古注 たまともぬけ

る―たまにもぬける、同古注 あらしてふらん―あらしといふ

らん、同 たき、をつる―たき、おへる、同古注 思て、こひ

しき時は―おもひいて、こひしき時は、同 ふうにしことをも

（定家本に一致）―ふりにしことを、同 御書のあつかり（穂

伏天）―御書のところのあつかり、同 春夏あき冬にもいらぬ

（曼伏天、定家本も一致）―春夏秋ふゆともいはぬ、同 へら

はせたまける（穂伏天）―へらはせたまひける、同 いまあす

か、は―いまはあすか、は（尊「いまは」の「は」墨補入）、

同 いはほとなるへき―いはほとなる、同 まくらことは、―

まくらことはに、同 あきのよのなかき―秋のよのなかきを、

6 きにふりか、れるをみて（曼穂）―ふりか、れるを、8

かしらに―ゆきのかしらに、13 しるへき（こと）にはやる―しるへに

はやる、22 おほられし―おほせられし、24 哥合によめる

（曼穂）―うたあわせに、40 むめのはな（宮伏）―むめのは

なを、41 はるのよむめのはなを（穂伏天、定家本も一致）―

はるのよのむめの花を、42 ひさしく（定家本に一致）―ひさ

しう、同 やとられて―やとられて、52 さくらのはな（穂伏天）

―さくらのはなを、同 さきの大きおほいまうちきみ（曼伏、

定家本も一致）―さきのおほいまうちきみ、62 よめる（尊）―

よみける、卷二部立 春和哥下（尊穂）―春哥下、72 たひね

しつへしーたひねしぬへし、76 かせのありかはー風のやとり
は、78 あひしりける人の(曼穂伏)ーあひしりて侍ける人の、
同「はなにさして」ナシ(曼穂伏)、80 わつらひける時に
(穂伏)ーわつらひはへりける時に、82 さくちるをよみけるー
とくちりはへりけるをみてよみける(尊、諸本異文多し)、異
本歌2 雲林院ー雲林院に、85 とうく(宮)ー東宮、92 き
さいのはやーきさいの宮、95 まかりける(穂金伏)ーまかれ
りける、103 もとかた(曼穂伏)ーありはらのもとかた、106
てたにふれつるーてたにふれたる、114 こ、ろもいとにーこ、
ろもいとに、115 女どもの(曼穂)ー女の、120 ふちのはなー
ふちのはなの

以上を概括すると、やや誤写が多い気がするが、保元二年清
輔本として特に不都合とも異色とも言えるような点はない。

最後に動物のうち、諸本とやや異なる点を挙げることにする。
仮名序の「延喜五年四月十八日に大内き、のともり云々」
に対する長大な動物があるが、そこに次のような字句を含むの
は、他には尊経閣文庫本のみである。

重案^(合)之二人に召^(合)古哥事ハ以前也、不^(合)注^(合)之、各可^(合)進
之哥ヲ今テ令^(合)撰ル、初日四月十八日ニテ有^(合)歌、貫之集詞

叶^(合)此議^(合)歌

また、本文でよみ人しらずの動物を何番歌に付すかは諸本で
異なり、宮本家本、曼殊院本は7番歌に、尊経閣文庫本、穂久
邇文庫本は14番歌に付すのに対し、本書はそれを以下のように
3番歌に付している(頭昭本にはこの種の動物なし)。

〔頭注〕無名哥惣數目六無^(合)相違^(合)、但春下無^(合)一^(合)と、恋一一
首加、自余部無^(合)相違^(合)

〔脚注〕不知人哥四百五十四首、中著^(著と注)□作人十三人、短哥
一、旋頭一、

二、福井市立図書館蔵本

本書は清輔本ではなく、貞応二年定家本に保元二年清輔本を
校合し、その目録と奥書を移記したものである。昭和五十四年
に刊行された福井市立図書館の『和漢古書分類目録』(長沢規
矩也氏編)に書影が掲げられているが、清輔本との校合につい
ては言及されていない。稿者は国文学研究資料館のマイクローフィ
ームによって気づかれた浅田徹氏の御指摘で知つたものである。
その後、原本の調査を遂げることが出来たので、ここに報告し
たい。

福井市立図書館蔵本(五―三二七別)

文明六年(一四七四)行阿書写校合・文明十八年(一四八六)

妙阿相伝奥書

三冊

袋綴。後補青・朽葉色花卉唐草文綴子表紙(二〇・二×二三・〇糶)。背を金襴で包む。外題なし。見返し、金切箔散鳥の子料紙、薄手斐楮交漉紙。分冊は、第一冊、仮名序、卷一―六、第二冊、卷七―十六、第三冊、卷十七―二十、真名序、奥書となつてゐる。墨付、第一冊、六八丁、第二冊、七五丁、第三冊、六七丁。遊紙、第三冊、卷二十(墨滅歌)末に一丁、その他なし。字面高さ、約一六・七糶(歌本文)。每半葉、仮名序七行、本文八行、真名序五行。和歌一行書。平仮名交り。内題、「古今和歌集卷第一(一―二十)」。清輔本及び嘉祿本との校合があるが、それについては後述する。

奥書は校合本からも転記しており、複雑である。⁶⁾

卷末真名序に続いて、まず、底本の奥書である貞応本奥書Aがある(以下A―Kは説明の都合上私に付した)。

A 此集家々所_レ称雖_レ説々多_二且_レ任_レ師説又加_二了見_一、為_レ備_二後学之證本_一不_レ願_二老眼之不_レ堪_二手自書_レ之_一、近代僻案之

好士以_二書生之_一失錯_レ称_二有識之秘事_一、可_レ謂_二道之魔姓_一、不_レ可_レ用_レ之、但如此用捨只可_レ隨_二其身之所_レ好_一、不_レ可_レ存_二自他之差別_一、志同者可_レ隨_二之_一

貞応二年七月廿二日癸亥戸部尚書藤判

同廿八日令_二読合_一訖、書_二入落字_一

伝_二于嫡孫_一可_レ為_二将来之證本_一

可_レ為_二末代證本_一之故以_二參議定家_一自筆本_一所_レ令_二書写

校合_二也_一

於_二勸物者少_一加之序

次に半葉を隔てて校合本である清輔本の目録(尊經閣文庫本と同様のもの)六丁半余りがあり、更に次のような奥書群がある。

B 此本從_二坊御時_一召_二籠内裏_一數年之後平_レ治元年七月九日

返_レ預之、仰曰、此本披露_レ無_レ由思食、仍合_二三帖_一賜_レ之、

夢不_レ可_レ借_二与_一他人_一之由云_二、仍弥秘_レ之、以_二若狭守通

宗朝臣_一自筆本_一書古今也、文字仕不_レ遠_二彼件本_一僧隆縁

為_二彼朝臣外孫_一所_レ相伝_二也、端書文_一彼朝臣筆也云_二、片

仮名書入歌等同彼人_一所_レ考入_二也、件古今貫之自筆小野皇

大_レ后宮御本之流也、於_二上下考物_一者管見之_一所_レ及予所_二

記付也、真名序又以同前、後日校合社院御本、朱筆彼御

本説也、件御本ハ貫之妹自筆本書写古今云、或説件一本貫

之妹、但有「序注」、少入有疑殆、件正本ハ閑院ノ贈大政

大臣本云、転々在「故花園左府御ノ許」、又陽明門院御本説

間ノ注付之、大略ノ不「遠」此本、件本貫之自筆延喜御本

云、後顯綱朝臣給預、其後転々於「公信朝臣ノ許」焼失畢、

若州号「讚州入道本」此本也ノ如「此古今」二箇度書「写之」、而

為「難」去人「被」取公畢、保元二年五月比更以書「写之」

ノ至「今度」深秘「箇中」死後可「左右」而已

和歌得業生清輔

C 書本云、(一〇七)建永二年十月廿七日以「聖護院ノ宮御本」書写、件

本三從大進清輔ノ朝臣本書写古今、仍自「目錄」奥彼朝臣「

所為也、然者雖「不」及「書写」為「散」後不審ノ書「写之」、大

都秘藏本也

D (三三三)三月 權中納言在判

E 元德三年姑洗廿日齋「書女令戈易ノ実孝卿本」顯然之間被「止

畢」

桑門昭忠

F 相伝畢

参議源朝臣有光

G 先人奥書本焼失了、此本猶「貽」住吉玉津嶋擁護欵、可「秘

可「仰云、

斯本勸物等神也妙也ノ更不「可」出「園外」者哉

散木柳源朝臣在判

D' 兩帖之本ノ批第十之奥ノ分寛元四年十一月五日以「御本」ノ書写畢
(一一四六)

權中納言実孝

E' 元德三年姑洗廿日ノ不慮感得畢」

和哥浦前司在判

F' 参議右近衛權中將源朝臣 在判

G' 梅雨中加「一見」畢

散木柳源朝臣在判

H 右以「実孝卿御本」文明第六之「曆」(一四七四)梅月中八之夕校合畢、

後覽ノ為「支證」批令「模」写之、朱墨「兩点」右ノ異彼本説也

南山喰霞貧士行阿「花押」

I 此集家ノ所「称雖」説々多「且」任「師説」ノ又加「了見」、為「備」

後学之證本、手自ノ書レ之、近代僻案之輩以「書生」失錯ノ

称「有識」之秘事、可「謂」道之魔姓ノ不「可」用レ之、但如「此

用捨只可_レ隨_二其_一身之所好、不_レ可_レ存_二自他之差別_一／志
同者可_レ用_レ之⁽⁷⁾

嘉祿二年四月九日戸部尚書判

于_レ時類齡六十五寧堪_二右筆_一哉

此本付_二属大夫為相_一在判

J 文明六年^{開途}風温廿七日以_二右近中将_一為相御本_一校、声
并左異等悉此／本之說、為_二末学_一批写留_早

行阿(花押)

(以下別筆)

K 文明十八年^{八月}丙午兩呂廿三日

相伝_丁

妙阿(花押)

本文に朱墨合点、朱声点を付す。印記なし。

さて、奥書の検討にうつる。

本書底本の奥書はAで、本書は貞応二年七月廿二日定家奥書本である。この点は本文からも確認される。例えば、卷一、18の箇所が「み山には松の雪だに消なくに宮こはこのべのわかなつみけり」「春日野のとぶ火の、もりいで、みよ今いくかありてわかなつみてん」と通常とは逆の排列となる点など所謂貞応本の特徴を示している。

次にB、Gは第一の校合本である保元二年清輔本の卷二十末

に付された奥書で、D、Gは注記のごとく、清輔本の卷十末奥書をここに移記したものである⁽⁷⁾。卷二十末のD、Gと卷十末のD、Gがそれぞれ対応している。

文明六年の年記を持つHが保元二年清輔本を校合した際の行阿(伝未詳)の校合奥書である。従って、厳密に言えば、行阿が貞応本を書写したのは校合以前のいずれの時点であってもよいことになるが、次の嘉祿本の校合が近接して行われていることから、本書の書写年時が校合を大きく遡るとも思われず、文明六年書写校合本と称してよいであろう。

Iは、保元二年清輔本に次いで校合された嘉祿二年定家奥書本の奥書、Jがその際の行阿の校合奥書、Kのみが別筆で妙阿(これた伝未詳)の相伝奥書である。

本書奥書の概略は右のようで誤らないと考えるが、細部にわたると不明な点がある。順に検討する。

Aの貞応本奥書、Bの保元二年清輔奥書は後者に誤写と覚しき箇所があるが問題ない。念のために言えば、保元二年清輔奥書には、尊経閣文庫本以下多くに共通のものと、それとやや異なる伏見宮旧蔵一本のものとがあるが、Bは前者である⁽⁸⁾。

C Dはこのまま見れば、Cの奥書を加えたのはDの「権中納

言」のように思えるが、D'によれば、「権中納言」は徳大寺実孝（永仁元―元亨二、一二九三―一三三二、三〇歳）であるから、建永二年（一二〇七）奥書の記主にはなりえず、CとDは別の奥書となる。C奥書の記主は不明である。またC奥書中に見える「聖護院宮」「大都」も何人か不詳。

D'に対応するD'奥書により、本書に校合された清輔本は寛元四年徳大寺実孝書写本であったことが判明する（実孝書写本そのものであったか否かは後に検討する）。実孝は公孝男で勅撰集歌人（新千載集に一首入集）ではあるが、早世したこともあり、目立った和歌事蹟はなく、どのような経緯で清輔本古今集を書写するに至ったかは明らかでない。

次いで、元徳三年桑門昭忠の感得奥書がある。E及びE'がそれである。署名はEが「桑門昭忠」、E'が「和哥浦前司在判」と異なるのは不審であるが、年月日が同一であり、同一人と考えたい。しかし、昭忠が何人かは不明である。E奥書が難読で意が取れないこともあって、状況が明らかでない。しいて推読すれば、書をひさぐ女より購得したというのではあるまいか。実孝書写本であることが明らかであるので、是非にと思つて求めたと言うのであろう。昭忠は徳大寺実孝ゆかりの者と解されな

くもないが、なお、不明とするべきであらう。また、「止畢」でなく「被止畢」とあることから、購得したのは昭忠自身ではなく身分の高い何人かの指示によつたもの（それが和哥浦前司）と考えられなくもないが、それ程神経質になる必要もなからう。いずれにしても、E及びE'は実孝書写本に追記された感得奥書である。

更に、F及びF'奥書は実孝書写本を相伝した源有光の奥書である。源有光は六条有忠男、延慶三年（一一三〇）生、延文二年（一一三七）四月薨、四十八歳（没年月は『常楽記』による）。F'奥書は「参議右近衛権中将」とあるので、元徳三年（一一三三）―八月より暦応元年（一一三八）十二月もしくは暦応五年三月より翌康永二年八月の間のこととなる。この年代はE及びE'奥書の元徳三年に近接していることにより、実孝書写本は昭忠から有光に直接相伝された可能性が高い。しかしながらその間の経緯は不明である。

また、G及びG'奥書の「散木卿源朝臣」「散樗卿源朝臣」も源有光であらう。有光は康永三年（一一三四）十二月に権中納言を辞して以後散位であったので、その間にG及びG'奥書を記したのであらう。G奥書によれば、有光は父有忠奥書の古今集

を所持していたが、それは焼失させてしまい、実孝書写本は助かったとのことである。「斯本勸物等神也妙也」とあるのは清輔本の勸物をさしていると考えられる。

そして、H奥書により、A奥書を有する貞応二年定家本にB、G奥書を巻末に、D、G奥書を巻十末に有する保元二年清輔本を文明六年五月に行阿が校合したのが本書であることがわかる。「後覽為支證批令模写之」は「後覽の支證の爲め、批はこれを模写せしむ」と訓んで、「後の人に実孝書写本が本物であったことを示すための証拠として、批（奥書）は模写した」の意であろう。本書の清輔本巻末の目録とB、G奥書はそれ以前の本文及びA奥書ならびに以降のH、J奥書と若干書体を異にしていることをその証とする考えもあろう。

しかしながら、行阿が校合に用いた清輔本が実孝書写本そのものであるとするには疑わしい点がある。

第一に、奥書部分は模写したと言いながら、奥書D、G、E、F、Gに「在判」の文字があるのは不審で、当然花押は模写されねばならない。これは行阿の用いた本が転写本ですでに「在判」とあったと考えるべきであろう。

第二に奥書E、F、GとE、F、Gはいずれも実孝書写本に加証され

た奥書であるから、それぞれが異った筆蹟でなければならぬのに、必ずしもそのようには見えず、実孝奥書以下が（模写で見る限り）一筆のようである。

結局、行阿は実孝書写本と考えたようであるが、実際は転写本だったのであろう。

また「朱墨両点右異彼本説也」とは校異の書人から帰納すると、朱墨の合点と「〇〇イ」と「イ」文字を右よせして記した異同は、実孝書写本との校異であるの意と思われる。

行阿は次いで同年I奥書を有する嘉祿二年定家奥書本で校合し、その結果は「声并左異等悉此本之説」とあるが、これも帰納すると声点と「〇〇イ」と「イ」文字を左よせにした校異がそれに該当するということになる。なお、「閑逢」は甲、「敦莊」は午でよいとして、「風温廿七日」の「風温」は月の異名とも思われず、単に風あたたかにしての意で、月はH奥書をうけて五月と解すべきであろうか。更に、「為末学批写留早」は、「末学のため、批（I奥書）は写し留めおわんぬ」で、またしても「批」を奥書の意に用いている。

ここまでが、本文の書写を含めて全て行阿の筆で、Kが本書を相伝した妙阿の相伝奥書である。

以上のごとくほぼ奥書は読解しえたが、伝未詳の人名が多く、伝来経路は不明の点が残る。行阿は日奥書で「南山喰霞貧士」と名のついでるので、高野の僧（または隠者で）本書は高野に伝来したのであろうか。

また、本書が文明六年校合本そのものであることが明らかにしたことにより、校異も相当程度信頼しうると考えられる。校異の方針については、奥書によって一部をうかがうことが出来るが、多くは帰納して考えねばならない。不明な点もあるが、大体次のようになっていいると思われる。

一、和歌の有無や排列は無視して注記しない。従って、貞応本と嘉禄本の排列が異なる19「み山には」18「春日野の」の箇所はもとより、清輔本の異本歌等についても何ら言及がない。

二、本文の校異はかなり丁寧に注記する。基本的に右傍に注記するが、奥書にあるように、最初清輔本、次いで嘉禄本の順に施されている。本文の異同は、清輔本は「〇〇イ」のように「イ」文字を右よせに、嘉禄本は「〇〇イ」のように「イ」文字を左よせにして区別する。両者が一致して底本である貞応本と異なる場合は「〇〇イ」とする。清輔本に加えられている新

院御本による朱の注記は、片仮名書きのまま「〇〇イ」として清輔本本行と区別する（墨書）。まれに校異の下に「イ」が三行割になっている場合があるが、その意味は不明。あるいは新院御本が校合二本と同じであることを念押しする表記かもしれない。なお、校異で対応する本文がわかりにくい場合、対応箇所傍線と「イ」を施し、更めて校異を記すこともある。

三、校合本において本文が加わる場合は補入して「イ」とし、本文が欠ける場合は右傍線を施して「イ」とする。「イ」の左右のよせ方で区別するのは同様である。

四、清輔本の勅物は基本的に書き入れない。一方、嘉禄本の作者注記で貞応本にくらべて独自のものは書き入れて、同じく左よせ「イ」とする。

五、声点は朱で施す。清輔本は基本的には声点はないので、これは定家本のものと同認められる。丁奥書によれば、声点は嘉禄本によって後に施されたことになるが、底本である貞応本になかったか否か明らかでない。ただし、本書の声点が貞応本より多く嘉禄本に近いことは認められそうである。

六、清輔本に施されている『新撰和歌集』入集を示す歌頭の墨合点と清輔本中、尊経閣文庫本など一部の伝本に見られる作

者の右肩に加える朱合点は移記されている。一方、嘉禄本には声点を加えた箇所や声点は加えなくとも声点が問題となりそうな箇所に朱合点を加える性格があるが、本書はこれも移記している。こうして、本書には清輔本による朱墨合点と嘉禄本による朱合点が併せて施されまぎらわしい。そこで、後者の朱合点には原則として墨で左よせ「イ」文字を添えて区別する。

以下本書の書入れのうち、本文校異部分を中心に列挙してみる。上段に前後の底本文、下段に校異を出来るだけ表記を変えずに示す。補入は補入箇所に。印を付し（書写面も概ねそうなっている）、下段に補入の文章を示す。清輔本と嘉禄本の区別は「イ」の左右よせで示す。欠けている字句については前後の底本文をカギカッコでくくって示し、その下に欠けた箇所（傍線を引かれた箇所）を「〇〇イ」の左右よせで区別する。

ただし、前後の文章を示さなくとも該当箇所が明らかな場合「〇〇イ」のみとした場合がある。書写面ではいずれも本行に右傍線があり、その傍線の下に左右よせで「イ」としているが、印刷面が煩雑になるため傍線を省略して表記している。注意されたい。意味不明、理解不能の校異もそのまま示す。

仮名序 もの、ふのこ、ろをも一なかをもイ、同古注 なり

たまへることをいへる一たまへるをいへるイ、同 つたはることは一はれるイ、同古注 ひめとは一ひめはイ、同古注 をかたに、うつりて一かたにうつりてイ、同 つちにしてはすさを一してすさのイ、同 すなほにして一にてイ、同人の世となりて。一よりそイ、同 すさのをのみことより。一そイ、同古注 「このかみなり」の「ない」(ママ、「なりイ」か)、同古注 みやつくりし給とき。一にイ、同古注 王仁と一わうにとイ、同古注 「この花はむめの花をいふなるへし此句無しイ」、同古注 事をろそかなりて一とてイ、同 からのうたにも一もイ、同 「むくさ」の「さい」(ママ)、同 「そへたてまつれるうた」の「れイ」、同古注 たとへなともせぬ物也一ことイ、同古注 かくれたる所一かはりたる所イ、同古注 そへうたとおなしやうなれば一かはりたる所かへたるなるへしイ(ママ、対応箇所不明)、同 とのつくりせりといへる。一ことのたくひイ、同古注 見えずなんあり一るイ、同古注 神そしるらん一ヤイ、同古注 わかれんことは。一えイ、同 いろいろこのみのいへに。一のみイ、同 か、るへく。一もイ、同 「こ、ろくをみたまひて」の「てイ」、同 さかし。一くイ、同 「さ、れいしに」の「さ、れイ」、同 「松虫」

の「松イ」、同 水のあわをーはイ(「わ」の校異)・トイ、同
さかえーへイ、同 「世にわひイ」、同 哥にのみそ心をー
はイ、同 「つたはるうちにも」の「もイ」、同 「ならの御時」
に「天武天皇イ」傍書、同 おほき。みつのくらゐーみイ、同
「もみちをは」の「をイ」、同 にしきとーかい、同 み。ー
えイ、同 「みたまひ」の「たまひイ」、同 「よしの、山」の
「、イ」、同 人まろか心にはーめイ、同 雲かと。ーそイ、同
「雲かとのみなん」の「のみなんイ」、同 「くれれ竹の世、
に」の「、イ」、同 たえずそーかたくなんイ、同 これよりー
か、りけるイ、同 さきー(傍書)さき不審未決(朱合点に
「イ」、同 あつめてーはせい(「つめ」の校異)、同 「ふた
り也きしかあれと」の「きしかあれとイ」、同 たかひにな
んありーるイ、同 かの御時よりーとしイ、同 「たかき人を
は」の「人イ」、同 たや。きーすイ、同 「僧正遍昭」の「僧
正イ」、同 哥のさまはーこ、ろイ、同 をうなをみてーおも
ひイ、同古注 なにかはーとイ(「に」の校異)、同古注 「さ
かのにて」の「てイ」、同 「なりひらは」の「はイ」、同古注
ねぬる夜のーつるイ、同古注 なりまさるかなーぬへきイ、
同 ふんや。、すひてはーのイ、同 「ことは、」の「、イ」、

同 「よききぬを」の「をイ」、同古注 かすみの谷にーのイ、
同 「宇治山の」の「山イ」、同古注 身をうき草のーよイ
(「身」の校異)、同古注 おいやしぬるとーらんイ、同 こ
の外の人にーみイ(「に」の校異)、同 おほかれとーけれイ、
同 よつるときー月イ・トキイ、同 「おほんめくみの」の
「のイ」、同 「山のおもとよりも」の「もイ」、同 「ふりにし
ことをも」の「もイ」、同 四月十八日。ーにイ、同 御書の
ところのー所イ(ママ)、同 「右衛門の府生」の「右イ」、同
ふるきうたー哥ともふるきイ、同 たてまつらしめーせい、
同 「たまひてなん」の「なんイ」、同 人をもーともをイ、
同 「あふさか山に」の「山イ」、同 春夏秋冬にもーともイ、
同 いらぬーはイ(「ら」の校異)、同 「まさこのかす」の
「かすイ」、同 「今は」の「はイ」、同 まくらことは。ーには
イ、同 「哥のことと、まれる」の「、イ」、同 「と、まれら
は」の「れイ」、同 「あふきて」の「てイ」、卷一内題 和歌ー
倭哥イ、卷一内立 内題下に「春哥上イ」とあり、1 春た
ちける日ーのイ、同 たちける日ーにイ・ヒイ、2 春。立け
る日ーのイ、6 ふりか、れるを。よめるー見てイ、同 花と
やみらんーえんイ・ライ、7 おりければーるイ、同 消あ

へぬ雪のーきえぬ雪のイ(ママ、傍線は「あへぬ」、同 花
とみゆらんーるかイ、8 きこえける時。ーにイ、同 我なれ
とーはなイ、9 「きのイ」、12 「斑子也イ」と傍書、同 谷
風にー山イ、13 紀。ともものりーのイ、14 大江千里ーよみ人し
らすイ、19 松の雪たにーまつイ(ママ、「松」の校異)、同
宮こはのへのーにイ、21 仁和のみかと。ーのイ、22 おほ
せられし時。ーにイ、23 「ぬきをうすみ」の「をイ」、同 み
たるへらなれーれるイ、24 「哥合によめる」の「によめるイ」、
同 源。むねゆきの朝臣ーのイ、同 今ーしほのーライ、25
たてまつれるーりけるイ、同 ふることにートキイ、26 春
しもそーときイ、同 みたれて花のーハイ、27 西大寺のー
西のをほてらのイ、同 遍昭ーへせうイ、同 春の柳かーあ
をやきイ、28 さへつる春はーなくなるイ、同 我そふり行ー
ぬるイ、34 松人のかにーとイ、36 笠にぬふてふーといふ
イ、37 「法師イ」、40 「梅花を、りて」の「をイ」、同 そ
れとも見えすー見イ(「そ」の校異)、41 はるのよ。ーのイ、
42 ひさしくーふイ、同 「かの家のあるしイ」、同 いひい
たして侍ーたりイ(「て侍」の校異)、同 よめるームタルイ、
43 「花の」の「のイ」、45 うつろひぬらんーにけんイ、47

「法師イ」、50 いたくなわひそーものなおもひそイ、同
「又は」の「はい」、52 きさきーいいイ、同 さ、せたまへる
をみてーさせるをみてイ、同 おほきー大イ、同 「おほいい」、
同 しかはあれと。ーもイ、54 石はしるーいはイ、同 たお
りてもこんーこんイ(ママ)、モテラムイ、55 「法師イ」、57
年のおいぬるーくれイ、同 「きのイ」、同 おなし昔にー
ナカラニイ、58 さくら。をよめるーの花イ・みてイ、59
「時に」の「にイ」、同 たてまつれるーりけるイ、同 さき
にけらしもーない、61 よみけるーめるイ、同 年たにもー
ことしたにイ・トシタニモ(ママ)、62 ひさしくーうイ、同
よみけるーよめるイ・ミケルイ、64 ちりぬれとーはイ、
65 いさやとかりてーリモチイ、67 「まうてイ」、68 哥合
の時。ーにイ、卷二部立 内題下に「春下イ」とあり、72 こ
の里にーとイ(「の」の校異)、73 かつちりにけるーりイ、
75 「の花のイ」、同 雪そふりつ、ーにイ(ママ、「そ」の校
異)、78 あひしれりーりて侍イ、79 作者ナシー清原のふ
かやふイ(清輔本・新院御本作者ありの意)、80 わつらひ。
けるー侍イ、同 「おろしこめてのみ」の「のみイ」、同 な
れりけるを見てーりたるをみてイ、同 作者注ナシー

典侍貞親 (嘉禄本の注記)、81 雅院一閑イ、同 延長元年哥
寛平延喜イ

也、進入□キイ本(詞書末書入、不詳)、82 花の。ーとくイ、
同 ちりけるを。ーみてイ、同 「さかすやは」の「はい」、同

みる我さへにー人イ・イ同(「イ同」とあるは嘉禄本は貞
応本に同じの意か)、83 風も吹あへぬーすイ、85 春宮ー

東イ、同 好風(貞応本の作者注記)ー良イ、86 「凡河内イ」、
同 ふるたに。あるをーもイ、87 よめるーミケルイ、88

「大伴イ」、90 「平城天皇イ」(「しもにありイ」と注記)、同
色はかはらすーかはらねはい、同 花は咲けりーそイ・る

イ、92 「法しイ」、同 うつろふ色にーをイ、94 春の哥と
てーはなイ、95 ましりなんーとひイ、99 あつらへつくるー

トイ、101 さく花はーサクラハナイ、107 「典侍イ」、109 を
のかは風にーそきイ(ママ、「風」の校異)、112 わか身もと

もにー人もイ、115 あへりけるにー侍イ(「あへり」の校異)、
117 夢のうちにもーそイ、同 花ぞ散けるーもイ、119 をう

な。のーともイ、120 ふちの花。ーのイ、同 さけりけるを人
のーさけるを人のイ、121 こしまのさきのーくまい、122 春

。雨にーの(ママ)、124 ほとりにーつらにイ、128 春しなけ
れはー花イ、同 鶯もーのイ、129 水のまにーみちイ、

130 おしみてもーめともイ、133 ぬれつ、もーそイ、134 哥

合にーの哥イ(清輔本「哥合の哥」の意)・のイ(嘉禄本「哥
合の春のはての哥」の意)、卷三部立 校異ナシ、135 人ま

るか。也ー哥イ、136 みてよめるーよめりけるイ・ヨメル、138
伊勢ーそせいイ、同 またしきほとんとききのイ、同 声

をきかはやーせよイ、140 五月きぬらんーつらんイ、同 ー
まそなくなりーるイ、142 「こえける時に」の「にイ」、同

とものりー貫之イ、143 き、て。ーよめるイ、144 いその神。ー
のイ、146 ふる郷さへそーヒトイ、159 「題しらすイ」、161

外になくねをーのイ(「に」の校異)、162 我。うちつけにー
もイ、163 た、みねータ、ミネイ(ママ)、同 むかしへやー

いにイ・ムカイ、164 なきわたるらむーかなイ、166 雲のい
つくにーこイ、167 つかはしけるーやれりけるイ、168 かよ

ひちはーにイ、卷四部立 内題下に「同上イ」とあり、170
秋。立日ーのイ、同 うちよするーフキイ、171 秋のはつかせー

かせかなイ、172 いなは。そよきてーもイ・とイ(「いなはも
そよとイ」の意)、175 もみちをはしにー船イ、177 寛平御時

。ーにイ、178 おなし御時。ーのイ、181 「題しらすイ」、184
もりくる月のーおちイ、187 秋そかなしきーこそ・ヲカナシ

(ママ、清輔本「秋こそかなし」新院御本「秋ソカナシキ」の意を誤れるか)、188 露けかりけりーるイ、189 いつはとはーもイ(上の「は」の校異)、192 さよなかとーにイ、同夜はふけぬらしーなりイ、193 「これさたの」の「のイ」、197 是貞ーこれたかイ、201 道はまとひぬーもイ、203 ちりてつもれるーシイ、「て」の校異)、204 と思ふは山のー見しはイ、同 陰にそありけるーさりけるイ、206 「在原イ」、210 かりかねはーのイ・ハイ(ママ)、211 うつろひにけりー色つきにイ、213 「き、てイ」、215 「題不知イイ」(ママ)・「□イニナシ」と注記、216 うらひれをれはーふイ、218 よめる。ー哥イ、同 「藤原イ」・フチハラノイ、220 独ある人のーぬるイ、222 「ある人のいはくい」、同 この哥は。ーある人イ、同 哥也と。ーなんまうすイ、223 枝もたわ、にーとを、イ同(「とを、」の傍書は底本に本来存したと考えられ、「イ同」は清輔本文に「とを、」とあるを示す表記であろう)、224 つゆしもにーシケミイ、同 ぬれてをゆかんーふイ・ヌイ、226 名にめて、おれる許そーかほをよみうちみはかりそイ、227 「僧正イ」、232 なぞ色にいて、ーとイ、234 めに見えねともーもイ・はイ、同 「見えねとも」の「もイ」、237 「兼覧王イ」・

或本ニかねみの大君イ、238 「まかりたりける時」の「たりイ」、同 「みなイ」、241 そせい。ー法師イ、同 かこそほへれーにイ・イ同(おそらく嘉禄本は貞応本に同じの意であろう)、242 「平良文」の「平イ」、243 寛平御時。ーのイ、同 袖とみゆ覽ーのイ、244 なくゆふかけのーくれイ、247 ぬれての、ちはー色イ、248 仁和のみかと。ーのイ、同 「僧正イ」、同 秋の、らなるーにイ、巻五部立 内題下に「同上イ」とあり、249 やすひてー朝^{トモヤス}康イ、250 浪の花にそーこそイ、同 秋なかりけるーけれイ、251 紀。ーのイ、255 梅の木。ーのイ、同 ありけりーるイ、同 おなしえをーにイ、同 西こそ秋のーにそイ、256 いし山。ー寺イ、257 秋の木のはをー山へイ、260 もり山ーるイ、261 「秋のうたとてよめるイ」、262 あたりをまかりけるーにありけるイ、265 「霧の」の「のイ」、同 さほの山へにーをイ(二行割の「イ」右へずれて書く)、267 は、その色はーモミチイ、268 むすひ付てーいひイ、269 御とき。ーにイ、同 たまうけるーひイ、同 殿上ーうへイ、同 あけられてーアリケレハ(ママ、「イ」ナシ)、同 つかうまつれるとなんーりたりけるなりイ、271 花まちとをにーほイ・オイ、272 おなし御とき。ーにイ、同 。はまをーすイ、

同 うへたりけるをーにイ、 273 いたれるかたをーりけるを
 イ、 273 いつか千とせをーハチヨライ、 274 ひとまてるをーを
 イ、同 かたをよめるーみてイ、 275 おもひし花をーきくイ
 276 よみけるーよめる(ママ)、 277 「凡河内イ」、 279 色の
 まされるーはイ(「る」の校異)、 282 侍ける。ー一時イ、同
 治部少輔五位イ、 283 「この哥は」の「はイ」、 284 「又は」の
 「はイ」、 291 よはからしーめイ、 292 紅葉ちりけるーけりイ、
 293 かけりけるをーかけるをイ、 298 秋のこのは、ーのイ、
 300 わたりける時。ーにイ、同 なかれけるをよめるー見て
 イ、 302 「坂上イ」、 305 「もみちの」の「のイ」、同 見てを
 わたらむーそイ、 306 「是貞のみこの家の哥合のうたい」(マ
 マ)、 307 「ほにもいてぬ」の「もイ」、 309 まかれりけるにー
 日イ、同 もていて南ーちいなむイ、 310 寛平御時。ーにイ、
 同 よめるーりけるイ、 313 たつねもゆかんーいなんイ、卷
 六部立 内題下に「同上イ」とあり、 315 冬そさひしさーわ
 イ、 316 きよければーさむイ、 317 吉野の山にーたかきイ、
 319 山の滝つせーたつきもイ、 325 とき。ーにイ、 328 「ふり
 てつもれる」の「てイ」、同 つもれる。ーかイ、 329 あとは
 かもなくーナクテイ、 330 よみけるーめるイ、 331 「ふりか、

れりける」の「れイ」、同 よめるーみけるイ、同 思かけぬ
 をーモカケヌイ、 332 「坂上イ」、 334 この哥。ーはイ、 335 雪
 。ふれるをーのイ、同 「花の色は」の「はイ」、 336 まかひ
 せはーうつりイ、 338 つこもりにーの日イ、 342 「時に」の
 「にイ」、同 「たてまつれる」の「れイ」、同 「紀イ」、卷七
 部立 内題下に「同上イ」とあり、 343 千世にやちよにーま
 しませイ、 344 君か千とせのーいのちイ、 345 すむ千鳥ーな
 くイ、 347 仁和の御時。ーにイ、同 君かやちよにーソチイ、
 349 業平ーゆきひらい、 350 「きのこれをか」に「家本用之イ」
 と注記、 351 宮のーきみにイ、同 。五十のー御イ、同 した
 にーもとにイ、 356 かはりてーあつらへられてイ、同 よみ
 侍けるーよめるイ、 356 「法しイ」、 357 内侍のかみ。ーのイ、
 同 四季ー四時イ、イ同イ(おそらく「四時」は清輔本に対
 校された新院御本本文を示し、「イ同」は嘉禄本は貞応本に
 同じの意、さらに「四時」が漢字表記のため清輔本本文
 であるとの誤解を招かないため「イ同イ」として本行は「四
 季」と念押ししたのであるう)、同 かき。ーつけイ、同 詞
 書注記中の「延喜聖主」に「帝イ」と校異、同 詞書末に清
 輔本にはありの意で「春イ」、 361 色まさりゆくーかはりイ、

362 秋くれとーなれイ、364 たまへりーひイ、同 峯たかきー
 ちイ(「た」の校異)、卷八部立 内題下に「同上イ」とあり、
 367 をくらさんやはーさらめかはイ、368 おやのまもりにー
 とイ、371 たちなん後はーときイ・ノチイ、372 とも。ーのイ、
 同 「たちのイ」、同 まかりけるにーれはイ、374 わかれけ
 る時。ーにイ、375 すみける人を。ーはイ、376 きみとしーき
 んイ、376 「籠」に注して「この本になしこと本にあり無御
 本イ」(清輔本により書入)、同 みつき、みとしーへイ(「つ」
 の校異)、377 人の家にとりてあか月いてたつとてまかり
 申しければ女のーいてたつとてまかりまうし、ければ女のイ・
 カタカナヲナシイ(清輔本の片仮名傍書新院御本は定家本に
 同じの意)、同 「よみ人しらすイ」(ママ)、378 「人の」の
 「のイ」、380 人ーときイ、382 「あひしれりける」の「れイ」、
 383 雪みるへくもーゆきイ、同 あらぬわか身はーにイ、384
 をとは。山のーのイ、386 恋やわたらんーもえイ、388 わか
 れおしみけるにーれはイ、389 よみけるーめるイ、390 あふ
 さかをーのせきをイ、391 「ちふるか」の「かイ」、392 花山
 にーはなみにイ、同 「ゆふさりつかた」の「さりイ」・サリ
 イ(清輔本本行は「さり」なく、新院御本は「さり」ありの

意)、同 見えな、んーぬかなイ・ナ、ムイ、393 山ーひ(「ゑ」
 イ、同 まうてきてーける日(ママ)、同 ついてにー□イ
 (「に」の校異、「無」か)、同 「よめるイ」、394 さくら。のー
 の花イ、396 しもはみゆらんーるイ、397 いたうーくイ、同
 「まかりいてける」の「いてイ」、同 おりに。ーきのつら
 ゆきかイ、同 「つらゆきイ」、399 。ものかたりしてーあひイ、
 同 「うれしくもあるかな」の「なイ」、403 いつれを道とー
 かイ(「を」の校異)、同 まかふまでちれーとイ、405 。とも
 のりー紀イ、卷九部立 内題下に「同上」(ママ)、406 月。
 いとおもしろくーのイ、同 左注末に「贈ーイ」とあるも不
 詳、407 「にふねにのりていてたつとて京なるイ」、409 「こ
 の哥は」の「はイ」、410 かきつはたいとおもしろくーいイ
 (「き」の校異)、同 おり。てーあイ、同 よめるーみけるイ、
 411 恋しうーくイ、同 思やれはーなんみやれはイ(「思やれ
 は」の校異)、同 「思わひて」の「わイ」、同 はや。ーくイ、
 同 「みな人ものわひしくて」の「ものイ」、同 「とあしと
 あかきイ」(ママ)、同 見えぬとりなり。ーければイ、同 こ
 れはーかイ、同 。き、てーうちイ、412 つれてこしーむイ
 (「つ」の校異)、同 かへるへらなりーるイ、同 「この哥は」

の「はい」、同「なんいふ」の「なんい」、417「まかりける時に」の「にい」、同「ついで」にい、418「いひけらくくはくい」、同「あまのかはらに」の「らい」、同「さか月はさせ」の「はい」、419「宿かす人もーるい」、420「おはしましたりける」の「たりい」、421「きるへきにーをい、巻十部立 校異ナシ」、422「そほちつ、ーけてはい(ママ)、423、(と)きすきぬれやーはい、424「みたれけるーたるい、425「つ、まめやーぬい、同「うつせみんかしーもい、426「うめー文い(ママ、「ムメ」の誤か)、428「思へらなるーりい、429「ふかやふー清原のい、431「ともりのー紀(ママ)、同「あはをかたまのーわい、432「秋はきぬーたちてい、同「霜のさむさにーかせい、433「あふ日かつらーかつらい・あふひい、435「なる花をーものい、442「花ふみしたくーちらすい、同「のはなければやーなるをい・レハヤい、445「後の」の「のい」、同「けつりはなさせりけるをーはへりけるい・ケツリハナサケルライ(清輔本本行「めとにはへりけるはなさせりけるを」の意)、448「からはきー題い、同「よみ人しらす。ー根本い、449「うはたまのーむい・ウい、456「春の」の「のい」、457「いか、さきちるーくるい・チい、458「浪ちはあともーやい(「あ」の校

異)、同「のこらざりけるーりい、463「秋くれとーはい、同「ちらすはかりをーそい、464「花。ことにーかい(ママ)、466「そこはしられんー南い、巻十一部立「内題下に「同上」(ママ)とあり、473「年をふる哉ー人をまつい、476「むかひにた、りけるーてい、477「よみ人しらすい」、同「しるしらぬーすい、478「祭にーのつかひにい、同「つかはせりけるーしい、479「花つみー□い(「つ」の校異、「無」か)、481「なか空にのみーきい(「の」の校異)、484「夕暮はーのい、同「人をこふとてーこふる身はい、485「人しつけすはーぬい、487「賀茂の社のーかみい、489「恋ぬ日はなしーそなきい、490「夕月夜ーつく日い、492「岩きりとをしーおい、同「をとはたてしーもい、493「ありてふをーといふをい、496「おもへはくる、ーしい、同「いろに出南ーぬへしい、497「あふよしをなみーもい、498「梅のはつえにーほい、500「下もえはせんーにせんい・をい、501「成にけらしもーない・モい、502「あはれてふーといふい・てい、508「物思ころそ」の「そい」、510「あまのつりなはーたくい・ツリい、同「くるしとのみやーライ(ママ、「と」の校異)、516「かたもなしーしらすい、524「成やするーありい、525「ねんかたもなしーやなきい(ママ、「い」の位

置判然とせず)、526 夢に見えつ、ーみゆるはイ、529 あらぬわか身のーものゆへイ、534 人しれぬーすイ、539 こたへぬ山はー空イ、544 ひとつ思にー人をイ、545 をきそはりつ、ーそへりイ、546 あやしかりけるーけりイ、547 ほにこそ人をーはイ・ライ、548 「ほのうへをてらす」の「をイ」、549 我かはあやなーかやイ・カハイ、同 恋すしもあらんーをせさらんイ、551 奥山のーをくらイ、同 すかのねしのきーしイ・スイ、同 けぬとかいはんーかとイ、巻十二部立 内題下に「同上」とあり、556 「人の」の「のイ」、同 「真せい法し」の「法しイ」、同 法しのーかい、同 「こと葉」の「葉イ」、同 もとにーひイ・モトイ、同 つかはせりけるーしイ、558 うつ、也南ーならイ、559 住の江のーよしイ、567 我は也けるーぬるイ、568 心みにーむイ、569 夢といふ物そーてふイ、572 むねのあたりはーわイ、575 「法師イ」、580 おもほえなくにーゆるかなイ、584 いふ人のなきーモナシ(ママ)、587 つねよりことにまさるわか恋ーもイ・もなをふかきイ(「もイ」と書入れたのち、更めて「もなをふかきイ」としたも)、589 「、(の)たうひける」の「うイ」、同 たうひけるーへイ(「ひ」の校異、位置不分明)、591 恋わたり銀ー

るらんイ、593 ぬきてわかぬるーれイ・キイ、598 ふりいてつ、なくーて(「い」の校異、不詳)・出てイ・「つ、イ」(嘉禄本「ふり出てなく」の意)、同 涙にはー川イ、606 わかなけきをはー思イ、同 我のみそしるーきくイ、同 卷十三部立 内題下に「同上」とあり、616 ついたちよりーにイ、同 ものらーをイ、同 「のちに」の「にイ」、617 家に侍ーなりイ、同 。としゆきの朝臣ー藤原イ、同 なかめにまさるーメマサル、イ、618 「返しによめるイ」、619 題しらすータイシラス(ママ)、620 ゆきてはかへるーきぬるイ、621 けぬへき物をーキエヌへキカナイ、同 「ある人の」の「のイ」、628 みちのくにーおくにイ、632 まもらすれはーセケイ、同 かへりてーきてイ(「て」の校異)、635 「をの、イ」、同 秋のよもーはイ、636 おもひそあへぬーもイ・はてぬイ、643 をき銀かたもーおい(「を」の校異)、644 人にあひて。ーのイ、645 「業平朝臣の」の「のイ」、同 伊勢のくに、ーへイ、同 。まかりたりけるときーかりのつかひに(ママ、「イ」あるべし)、同 ひそかにーみイ、同 すへ。なくてーもイ、646 よ人さためよーこよひイ、647 さたかなるーやイ・イ同(「イ同」は嘉禄本本文が貞応本に同じことを念押ししたもの)、

650 あらはれはてイ、同 あひみ初けるーけんイ、651 滝の音にはーツイ(「の」の校異)、654 おもふとちてイ、656 さもこそあらめーサコソハ(ママ)、同 人めをよくとーもるとイ、同 みるかわひしきーすへなきイ・さい(ママ、不詳)、657 夢ちをさへにーはイ・ニイ同(「ニイ」は新院御本、「同」は嘉禄本がそれに同じの意であろう)、662 そこに通ふとーひてイ、664 をとにたにーのみイ、同人のしるへもーくイ、665 みるめのうらにーそこイ・ウラニイ、668 色にいてぬへしーくイ、670 「平イ」、670 なき恋をーものイ、671 人麿か。也ー哥イ、672 かくるとすれとーすイ・ルイ、676 ちりならぬ名のーきイ、同 空にたつらむーかなイ、巻十 四部立 内題下に「同上イ」とあり、680 もゆるわかこひー身をイ、685 「ふかやふイ」、686 「凡河内イ」、689 たまひめーはイ(「た」の校異、ママ)・無御本イ、690 いさよるにーひイ、691 「待いてつる哉」の「いイ」、692 またすしもあるすーしイ、693 わかもとゆひにーのイ(「イ」の位置不分明)、同 霜はをくともーやをく寛イ、694 「露を、もみ」の「をイ」、697 敷嶋のーやイ、700 物とそ我もーはイ(「そ」の校異)、702 「あふみのイ」、705 「あひしりて」の「あひイ」、同 雨

のふりけるをなんーなるをうなイ(ママ、「る」以下の校異)、同 よめりけるーめるイ、706 「あるイ」、同 「さためす」に校異あるも虫損読めず、同 つかはしけるーせりけるイ・セリイ(ママ)、同 成ぬれはーとまらねはイ、707 ありてふものをーといふイ・テイ、708 すまのあまのーうらにイ、709 成ぬれはー見えイ、714 「法師イ」、715 きけはかなしきーなイ、717 はなれなめーわかれイ・スイ(「か」の校異)、718 心。つくからにーのイ、同 かなしきーこひイ、720 「あつま人」の「人イ」、722 あた浪はたてーうはイ、724 みちの。くのーおイ、同 みたれんと思ーそめにしイ、725 思ふよりーひ(ママ)、726 心し秋のーも(ママ、「の」の校異)、731 ふる日となれはーみイ、同 袖そぬれるーひちぬるイ・ぬるイ(ママ)、733 あはとうきなんーにイ、734 いにしへにーむかしイ、735 あひかたくありーかりイ・クアリイ、同人はしらすやーしるらめやイ、737 「右のイ」、738 「題しらすイ」、740 昇 延喜八年中納言 民部卿 十四年大納言イ、742 ことつてもなしーのなきイ、745 しのひにーてイ、同 ものらーをイ、同 いそき。ーてイ、巻十五部立 内題下に「同上イ」とあり、747 にしのたひにーいイ、同 とをかあまり。ーは

かりイ、同 こひてーオモヒテ、イ、同 にしのたひにーい
(ママ、「ひ」の校異)、同 「いきて」の「いイ」、同 かた
ふくまで。ーにイ、同 よめるーヨメリケルイ、同 もとの身
にしてーヲナシ(ママ、「もとの」の校異だが記入箇所大き
く誤り、748 詞書「題しらす」の右傍にあり)、748 枇杷左大
臣イ(作者注記)、同 「ほにいて、」の「いイ」、749 「朝臣
イ」、同 よそにのみーをとにイ、754 花かたみーつい、同
めならふ人のー色イ御本如此(「人」の校異)、同 忘れぬ
らんーにけん(ママ)、755 おひてなかる、ーおもひみたる、
イ(「イ」の位置やや不分明)、同 うらなれはーやイ、同
あまはくるらめーよイ(「く」の校異)、756 わか袖にーはイ、
761 君かこぬ夜はー五イ、同 我そかすかくー四イ(以上二
項四五句逆の意)、762 きこえさるらんーこさらんイ、763
ふりぬるはーれイ、769 貞朝臣登 備中守 仁和御子イ(作
者注記)、同 なかめふるやのーむるやとのイ、772 こめや
とはーぬイ、773 わひにし物をーシテイ(ママ、「シキ」の誤)、
同 衣にか、りーかはりイ・カ、リイ、776 音にそ鳴けるー
ぬるイ、779 なかぬ日そなきーはなしイ、782 うつろひにけ
りーおとろへにイ、784 きのありつねかーの(ママ)、787

身をわけてのみーしもイ、788 つれもなくーなくもイ・モナ
クイ、789 とふらへりーひ侍イ・ヘリイ、同 ふもとをみて
そーよりのみイ、同 かへりにしーきぬイ、790 「あひしれり
ける」の「れイ」、同 ふちをーみイ、同 つかはけりける
(ママ)ーしイ(「けり」の校異か)・せりイ(ママ)、同 あさ
ちにはーはにイ、791 「物おもひけるころ……よめるイ」、792
ともりのりー読人不知イ、同 いひなからーしりイ、795 色
にもありけりーいろにさりけるイ・そイ(ママ)・るイ、799
あかす散ぬるーてイ、803 「法しイ」、807 直子ーナホイコイ、
同 世をはうらみしー人イ、808 思しらすはーもイ、812 も
はらたえたるーいともイ・ぬるイ、818 数にそありけるー数
にさりけりイ(ママ)・ソアイ、卷十六部立 内題下に「同上
イ」とあり、830 忠仁公イ(「さきのおほきおほいまうちきみ」
の注)、同 延喜之比太政大臣只二人仍雖不辭官前ト云 前
後之由也イ、同 「法しイ」、同 しらかは、ーのイ、831 僧
都勝延ーイ同(嘉禄本文は貞応本に同じの意か)・僧正へ
んせうイ、835 「みふのイ」、839 時しもあれーまれイ・モアイ、
同 秋やは人にー君か(ママ、「人に」の校異)、842 をくて
の山田ーおイ、同 思けるかなーぬるイ、844 おもひしてー

にイ(「し」の校異)、同 衣の袖はーのイ、846 御国忌ーお
 ほんイ、同 「けふにやはあらぬ」の「はイ」、847 仁明イ
 (「深草のみかと」の注)、同 みかと。ーのイ、同 「御時に」
 の「御イ」・「にイ」、同 ひゑーイ、同 「又のイ」、同 若
 の袂よーヤイ、848 「身まかりての秋」の「のイ」、同 まか
 りけるをーにイ、同 「かのイ」、同 いれたりけりーるイ、
 同 「右のイ」、849 君に別しーをイ、850 うへ。けるーたりイ、
 同 人。ーのイ、851 むかしのこさにーにこさすイ、853 ーむ
 らす、きーもとイ、854 「うたともと」の下の「とイ」、857
 いくはくもあらてーなくイ、同 「女みこ」の「みこイ」、同
 かたひらのーにイ、同 「ひもにイ」、858 「まかれりける」
 の「れイ」、860 をかぬ許をーそイ、862 つけりけるうたーつ
 ける哥イ・侍イ(嘉禄本「つけ侍けるうた」の意)、巻十七部
 立 内題下に「同上」とあり、863 露そをくくなるーヤイ・イ
 同(嘉禄本貞応本に同じの意ならん)、同 かひのしつくかー
 い(ママ)、864 まとるせる夜はーノイ、同 物にそありけ
 るーさりけるイ・ニソイ、865 うれしさをーきイ、同 袂ゆ
 たかにーけくイ、866 物にそ有けるーさりけるイ・ソアイ、
 868 やりけるー侍イ(「やり」の校異)、869 寛平六年五月五

日中納言即從三位イ(「藤原のくにつねの朝臣」の注)、同
 于時大納言左大将イ(「近院の右のおほいまうち君」の注)、
 870 いその神。ーのイ、同 並松ーなむまつイ、同 よろこひ
 。ーてイ、同 「いひイ」、871 高子 貞観八年二月女御 十
 年十二月生第一皇子十一年三月為皇太子イ、同 元慶元年正
 月即位日為中宮六年正月為皇太后宮 春宮母儀女御也イ、同
 たまひけるーしイ(「ける」の校異)、同 けふこそはーよ
 りイ、同 神代のことをーもイ、同 思ひいつらめーするイ、
 873 「左のイ」、874 「きこえけるに」の「けるイ」、同 あり
 つるーけるイ、875 なさはなり南ーライ(「さ」の校異)、876
 「まかれりける」の「れイ」、同 あした。ーにイ、同 匂ひ
 ける哉ーぬるイ、879 月をもめてしーにイ・ライ、880 きた
 りけるにーれはイ、同 いたらぬ里もーこともイ・サトハイ本、
 881 見え。けるをーハヘリイ、同 出る月影ーかなイ、884
 「物かたりを」の「をイ」、同 十一日ーとを日あまりひとひ
 イ、同 よみ侍けるーめるイ・ヨミケルイ、885 慧子 母藤
 列子從五位上是雄イ、慧子 代始齋院天安元年二月薨之(中
 略)母同惟喬二年而退イ、同 あきらけいこーきイ、889 「あ
 りこし物を」の「こイ」・「こイ」を「に」に校異あるべきもナシ、

890 ぶりぬる物はーゆくイ・ヌルイ、891 うれを、もみーす
ゑイ・うれイ(ママ)、892 おら(うら)のしたくさーふイ、893 とま
らぬ物をーたイ、895 「このみつの哥」の「みつのイ」・ミツ
ノイ、同「となんイ」、900 「ふみをもて」の「をイ」、同
「きたりけるを」の「けるをイ」、同 ことは、ー事イ(「は
の校異)、同 さらぬ別もーのイ、同 ありといへはーティ
(「とい」の校異)902 「ありはらのイ」、同 やへふりしけるー
にかさなるイ、903 おほみき。ーなどイ、同 おほみあそひ。ー
などイ、同 つかうまつれるーりけるイ、同 あはましもの
をーかい、904 宇治の橋もりー姫イ・モリイ、同 あはれと
そ思ふーかなしとイ、同 「あはれとそ思ふ」の「そイ」・は
イ(「そ」の校異)、910 よるかたもなしーくイ、912 玉津し
まかもーかなイ、914 ありとたにきくーナイ、915 たかしの
浜のーうらい、同 まちわたりけれーつイ、916 「まかれり」
の「れ」に傍線(ママ)、同 まかれりーたり(ママ、「り」
の校異、前項と併せて「まかりたり」の意か)、同 おふる
玉もをーのイ、918 けふゆけはーとイ、920 あそひける日ー
をイ、同 おはしましたりけるーてイ(「たりける」の校異)、
同 ゆふ。つかたーさりイ、同 おはしまさんーなんイ(「ま

さん」の校異)、923。布引のーおなしイ、927 「人々に」の
「にい」、同 よませたまうーひイ、同 けるにーれはイ、同
主なくてーライ、930 所。おもしろしーをイ、卷十八部立
内題下に「同上イ」とあり、936 しかりとてーあい、同 ま
つなけれぬーる、イ、937 侍ける時。ーにイ、同 いか、と、
は、ーにい、938 えてた、しやーむイ、939 あはれてふー
といふイ、940 あはれてふーといふイ、943 いづらわか身のー
はイ、950 宿もかなーいへイ、951 うきこそまされーさい、
952 すまはかはーモイ、同 世のうきことのー時イ、956 猶
うき時はーニイ、957 ものおもひ。ける時ー侍イ、同 竹の子
のーねイ、959 竹のよのーくれ竹のイ、同 高津内親王イ、
962 こもり侍ける。にー時イ、963 返しーかへり事イ、965 ほ
とはかりーたにもイ、966 たちはきに。侍けるーてイ、969 い
ひをくりけるーれりイ(「り」の校異)、同 「こ、かしこに」
の「にい」、同 よふくるまで。ーにい、同。つかはしけるー
よみてイ、同。なりひらの朝臣ー在原の(ママ、「イ」なき
も清輔本の校異と思われる)、970 まかり。けるにーて侍イ、
同 雪。ーのイ、同 ふか、りけりーれはイ、同 「いたりて」
の「たい」、同 忘れてはーつ、イ、973 「この哥は」の「は

イ、同 おとこに一人にイ、977 ありける。にーおりイ、978
よめるーみけるイ、同 雪とつもらはールトイ、979 「宗岳
大頼イ」、同 きゆる時あるーたい・キイ、983 我いほはーヲ
イ〔ほ〕の校異)、985 「いれたりける」の「たりイ」、同
すむへき宿とーさとイ、986 まうつるーてけるイ、同 源。い
たるの朝臣女ーのイ、988 嵐のかせはーのイ、同 わひつ、
そぬるーふるイ、990 ふちにもあらぬーすイ、同 わか宿もー
はイ、991 かよひつ、ーてイ、同 こうち。けるー侍イ、992
いりに鋌ーとめてイ、993 「ついでにイ」(ママ、おそらく
「ついでイ」の誤)、同 よ。ななきうへにーのイ、994 ひとり
こゆらんーゆくイ、同 すみわたりけるーりイ、同 この女
。ーのイ、同 なく。てーなりイ、同 あひたにーほとにイ、
同 「もしイ」、同 まねにてーさまイ・マネイ、同 なかに。ー
てイ、同 かくれみ。れはー侍けれイ(ママ、「れ」は衍)、同
夜ふくるまでーま、にイ、同 「うちなけてイ」、同 き、
て。ーいとあはれとおもひてイ、同 いひつたへたりーるイ、
996 わすられんーれなんイ、997 いつはかり。ーにイ、同 文
屋。ーのイ、同 なのにおふ宮のーのみかとのイ(ママ、「おふ」
以下の校異)・ナニヲフミヤノイ、998 寛平。ーのイ、1000 「よ

みてイ」、同 山川のーみつイ、卷十九部立 内題下に「同上
イ」とあり・「雑鉢イ」(清輔本内題下に「短哥」とあり、「雑
鉢」の文字ナシの意)、1001 もえつ、とはにーはにもイ・ト
ハニイ、同 かくなはのーにイ、同 えふの身なれはーティ
〔え〕の校異)、同 おもひはふかしーくイ、同 たきつ心
をーはイ、同 をく露のーしもイ、1002 たてまつりしーける
イ、同 をくる心もーれイ〔く〕の校異)・ころも、イ・コ、
ロモイ、同 おほせかしきーみイ、同 とれりとすれとー
しふとイ〔れりと〕の校異)、同 かへりみもせぬーすイ、
1003 人まつこそはーろイ〔つ〕の校異)、同 忠峯集哥 こ
れを思へは いにしへに くりりけさせる けたもの、イ、
同 そてをかしーなすイ、同 これにそはれるーせい、同
くすりかもーもかい、1004 うたい(清輔本詞書「うた」とあ
りの意)、同 いはし水ーつ、しイ、1005 うちしくれーはつイ、
同 こきちらしーとイ〔こ〕の校異)、同 年をあまたにー
もイ、1006 七条のきささきーいのイ、同 たまひ。けるのちーに
イ・うてのちイ(清輔本「たまうてのち」の意)、同 よみけ
るーめるイ、同 延喜七年六月八日崩三十六イ、1007ノ前 「旋
頭哥イ」、1007 うちわたすーるイ、1008 た、なのるへきーすみ

るイ(「なるる」の校異)、1010 そめるなりけりーぬイ(ママ、
「る」の校異)、1014 またく心をーきイ(「く」の校異)、1015
「題しらすイ」、同「凡河内躬恒イ」、同 なかしてふよはー
といふイ、1017 のへにたはる、ーミタイ、1018 花のすかたそー
のイ、1021 「清原イ」、1022 た、るに我はーたくひにしあれは
イ(ママ)、1027 我おほしといふをイ(「お」の校異)、1028
むなしけふりをーは欵イ、1030 心やけをるーりイ、1031 哥合
のうたーによめるイ(「のうた」の校異)、1032 か、らぬ山のー
タ、イ・イ同(嘉祿本本文貞応本に同じの意ならん)、1033
つまこひはーにイ、1034 なそわか恋のーとイ・ソイ、1036 「壬
生イ」、1037 いひはてぬーめイ・イ同(嘉祿本本文貞応本に同
じの意ならん)、1038 思ふてふーといふイ、1040 いてや心はー
ない(「て」の校異)、1041 人をおもはぬーえイ(「は」の校異)、
同 むくひにやーつみとてやイ、1042 ナシー一本ふかやふイ、
同 なかりけるやはーりイ(「る」の校異)、1043 ナシー一本
よみ人しらすイ、1044 うつるてふなりーといふイ、1045 はな
ちすてつるーたるイ、1046 声のやとりのーこそイ、1047 夏は
人まねーかつイ・ナツイ、1048 平中興ーたひらのなかきイ、
1052 まめなれはーとイ、1053 名のたつことのーにイ(「名の」

の「の」の校異)、1054 わか身にいとよるといへはーとく
るとイ(清輔本「わか身にいとくるといへは」の意)、1056
題不知イ(清輔本にありの意)、1058 になひもてーおもひイ、
同 あふこなきこそー身そイ、同 恋しかりけれーわひしイ、
1063 ことそやさしきーもイ(「そ」の校異)・くイ、1067 事ー
心イ、1068 立よりてーれはイ、巻二十部立 内題下に「同上」
とあり、1070 しもとゆふーいふイ、1071 あさたちくれはーと
イ、1073 しはつ山ーつは山イ、1074 神のみまへにーむろにイ、
1076 ひとつもみるかにーねイ、1078 道のくのーおくのイ、1079
わか門のーやとのイ、1082 御へーおほんへイ・御へウイ、1083
御へーおほんへイ・御へウイ、1084 御へーおほんへイ・御
へウイ、同 みの、哥ーくにのイ、1086 あふみのやーちのイ、
同 君か千とせはーをイ、同「あふみイ」、1087 明ぬともー
れとイ、1088 いつくはあれとーらイ、1089 ますかけもなしー
はイ、1096 しろもしらぬもーすイ、1097 け、れなくーらイ、
1098 人にもかもやーにもイ(「もや」の校異)、1100 かもものや
しろのーまつりイ、墨滅歌標題 墨滅歌ー滅イ、1103 友則。ー
下イ、同 こひつ、をれとーはイ、1104 おきのゐてーをイ、
1105ノ次「巻第十一 桂宮下」とあるを「桂宮下」を「巻第

十二」の前行に移動「イ」とする、III おとらざりけりーを
 (ママ)、真名序 古質之。一鉢イ、同 皆落一以イ、同 其
 華孤。栄一独イ(「孤」の校異)・以イ、同 以此為花一之イ
 (「此」の校異)、同 二三人。一而已イ、同 其詞華一其歌甚
 花イ、同 喜撰一撰喜本ニ、同 其一詞イ、同 詞一甚イ、同
 古。衣通姫一之イ、同 「有逸興而鉢」の「而鉢イ」、同
 「不用詠和歌」の「詠イ」、同 相将一将相イ、同 後世一輩
 イ(「世」の校異)、同 義憤一通イ(「憤」の校異)、同 神
 明。也一者イ、同 野宰相一野相公イ、同 皆以他才一依イ
 (「以」の校異)、同 陛下一伏惟イ、同 「于今九載」の
 「于今イ」、同 況哉一乎イ、同 人麿一丸(ママ)
 以上、本書の校異のうち、合点、声点に関わるものを除くほ
 とんど全てを掲げたことになる。紙幅を多く費やし煩雑にすぎ
 る感があるが、本書の校異にはそれなりの注目すべき点がある
 と認め、あえて列挙したものである。

それは、本書が貞応本、嘉禄本、清輔本という代表的な三本
 対校の形をとっていること、また、本書の校異は文明年間にお
 ける校異作業をそのまま伝えていて、当時としては画期的といっ
 てもよいことである。この作業を行った行阿の伝記が全く不明

のため、背景が明らかにならない点は残念であるが、室町中期
 においてこのような校合作業が、必ずしも著名とは言えない人
 物の手によってなされたことは留意されなければならないであ
 ろう。校合作業はきめ細かく、質も高いものと認められ、一部
 に意味不明の箇所はあるものの、大部分は校合本本文を復元す
 ることが可能である。

和歌の出入りや、排列の異同が注記されていないのは、残念
 であるが、字句の異同から、対校本が奥書通り、まさしく清輔
 本、嘉禄本であることは十分に認められる。試みに巻一卷頭部
 分を見ることとする。

部立の「春哥上」が改行せず内題下にあるのは、清輔本のみ
 ではないが、清輔本の特徴である。

1 詞書に「春のたちけるに」とあるのは正しく清輔本で新院
 御本との校合にまで言及されている。

6 詞書に「ふりか、れるを見て」と「見て」を存するのは、
 必ずしも全ての清輔本にあるわけではないが、曼殊院本、穂久
 邇文庫本、家蔵本のように一部の清輔本に見えるものである。

6 「花とやみえん」は清輔本である。

7 「花とみゆるか」も清輔本である。

14 作者「よみ人しらす」は清輔本である。

このように対照していくと清輔本と定家本が対立する箇所下次々と清輔本に一致することが判明する。

しかし、その一方、清輔本としては不審な本文も少なからずある。

巻一卷頭から少し見ていくだけでも、7「おりけるは」(「る」不審)、8 詞書「きこえける時に」(「に」が定家本と異なり存するのはよいが、清輔本なら「まうしける時に」とあるべき)、23「ぬきうすみ」「みたれるへらなれ」等いずれもおかしい。もともと、清輔本は定家本に比べ本文のゆれが大きい上、古写本でも誤写や不審な本文が目立つのが通例であるが、それを考慮に入れても、行阿の用いた清輔本は必ずしも善本とは言い難いようである。

作者名の表示について二、三著しい不審を挙げてみる。

138 作者「そせい」

142 作者「きの貫之」

377 作者ナシ

477 作者ナシ

792 作者「読人不知」

105 作者ナシ

このうち、377 477 105 は作者名の書落しと考えられるが、それ以外は不審である。

一方、嘉禄本との校異であるが、当然ながら清輔本よりはるかに少ない。また、嘉禄本の原本ではなく転写本であるから本文の転訛が考えられる。

ここで片桐洋一氏が掲げられた貞応本と嘉禄本の異同箇所三十一箇所⁽¹⁰⁾について、本書の嘉禄本との校合状況を見てみると次のようになる。

一致するもの 1 59 94 134 143 272 300 357 374 442 556 745 849 の十三箇所

本書底本が既に嘉禄本に一致しており、結果的に一致するもの

656 663 892 937 1067 の五箇所

一致しないもの 1 36 108 120 382 387 396 417 783 852 930 1077 の十一箇所

貞応本と嘉禄本の異同と見なし難く比較の対象としなかつたもの 1 204 584 の二箇所

割合から見れば、必ずしも一致率が高いとは言えないが、行阿が校合に用いた嘉禄本が転写本であり、いかなる素性のものが明らかでない(行阿が「奥書でこれを」「右近中将為相御本」と呼称しているのは、「奥書末尾に」「此本付」属大夫為相

在判」とあるのによつているのであろうから、原本でないこと勿論である)ことを考えれば、まず嘉禄本の性格を有していると言つてよいであらう。

また、底本である貞応本についてもその本文を検討しなければならぬが、あまり善本とは言えないように思われ(冷泉家本と約二百箇所異なる)、時折、貞応本どころか古今集本文としてもいかがかと思われる本文を有する場合がある。しかしながら、以前にも述べたように、中世に流布した古今集本文(多くが貞応本の末流本文と考えられる)がいかなる本文を有していたかについて明かにされていない現状では、本書の底本である本文が、当時の貞応本としていかなる位置にあるのか(つまり、この程度原本から転訛しているのが通例なのか、それとも特異なのか)が判然としないので、善本でないと言い切れることは出来ない。

ともあれ、本書は、清輔本文研究の一資料としてのみならず、室町期の本文校勘作業の様相を知る上からも重要な存在であるといえる。

三、茂山乙本古今和歌集

国文学研究資料館に一冊の複製本がある。葡萄牙色表紙の和綴本で、表紙中央の題簽に「茂山本古今和歌集」とある(函架番号シ二一五八)。この複製本の存在と、この本に清輔本に関連する点があることは三、四年以前浅田徹氏の御教示を得ていたのであるが、一見したところ、清輔本に関わる本文を有する伝本ではあるが、純粹の清輔本とは言い難いこともあつて、そのままにしてしまったものである。ただ、本複製本そのものも稀観で、本伝本もその存在がほとんど知られていないようなので、ここに紹介することとした。

従来本伝本に言及されたのは、管見の範囲では野口元大氏のみで、「古今和歌集定家本始終」(「上智大学国文学科紀要」17平12・3)において

ついでをもつて付言すれば、『毘沙門堂本』のように、卷十の後に墨滅歌を一括して収めている本が存する。茂山書道文庫所蔵の『古今和歌集』(乙本)がそれである。卷十までの零本であるが、巻頭に真名序、ついで仮名序を置く。本文は清輔本であるが、307番歌を欠き(稿者注、307は存在する)、墨滅歌の103・104・105を本文中に持つかなり特異な本である。(14頁)

とされている。

野口氏には夙く「茂山本古今集解題」(「和歌史研究会会報」47昭47・10)という御論考があるが、そこで紹介された本は別本で、それを甲本とするゆえに本伝本を乙本と称するわけである。

実は本伝本は本文の混淆や改竄著しい本で、本文の価値は高いとはいえない。従って以下概略を述べるに止めることを許されたい。

本複製本は既述のように和装(袋綴)一冊本、表紙、扉に続いて江守賢治氏の識語が一頁ある。本文はアート紙に写真を印刷し、一頁上下二段、各見開きを取める。従って一頁に写本の四面分が収まる。表紙、遊紙は撮影されていない。墨付一面(半葉)ごとに漢数字で番号を付し、一より百六十七に及ぶ。奥に「昭和四十八年六月二十日/百部限定版 第拾四号」とあって、「拾四」は墨筆書入れ)私家版として頒布されたものと思われる。

茂山書道文庫蔵本(古今和歌集乙本)

存真名序、仮名序、巻一一十、墨滅歌

写

一帖

綴葉装。墨付、八七丁。每半葉、真名序八行、仮名序、本文九行。和歌一行書。平仮名交り。内題、「古今和歌集序 紀淑望」(真名序)、仮名序にはなく、本文は順に「古今和歌集卷第一 黄門傳(ママ)/春哥上 六十八首」「古今和歌集卷第二/春哥下 六十六首」「古今和歌集卷第三/夏哥 卅四首」「古今和歌集卷第四/秋哥上 八十首」「古今和歌集卷第五 秋哥下 六十五首」「古今和歌集卷第六 冬哥 廿九首」「古今和歌集卷第七 賀哥 廿二首」「古今和歌集卷第八 別離哥 四十一首」「古今和歌集卷第九 羈旅哥 十六首」「古今和歌集卷第十 物名哥 四十七首」とする。

巻十末に墨滅歌があり、奥書はない。

全巻に墨声点を付す。

全巻に清輔本の勘物と覚しきものが書入れられているが、脚の所定の箇所ではなく、傍注等余白に書かれている。

新院御本との校異を示す朱傍注はない。

全巻に「新撰和歌集」入集歌であることを示す歌頭の合点がある。

本伝本について、江守賢治氏の識語には次のようにある。

茂山清太郎氏が所蔵されてゐる古今和歌集には、甲本と乙本とがあつて、これはその乙本である。乙本は上巻のみで下巻を欠いてゐる。

筆者についての確證はないが、堀江知彦先生は「伝・藤原為氏筆」と認められる。まさしく鎌倉時代前半の筆写であるが、巻五までと巻六以下とはその筆致を異にしてゐるので、二人または三人の手になるとの説と、一人の筆であるとの説がある。(後略)

本伝本の筆蹟であるが、複写で見るとかぎり、古筆で二条為氏筆と極められる類いのものとはあまり似ていないように思われる。書写年代も古写本であることは認められるが、複写では判断出来ない。

次に一筆か否かであるが、おそらくは二筆、左のように分かれると思われる。

A 筆―真名序、仮名序、卷一―四、墨滅歌

B 筆―巻五―十

江守氏が筆蹟のわかれ目を巻五までとされたのは誤記であらう。

さて、両筆のわかれ具合が必ずしも自然でないので、A 筆 B

筆いずれかが本来のもので、残欠となつたものを補写したとも考えられるが、両筆が類似の筆蹟であり、書写年代が大きく隔たるようにも思われないこと、また、両筆の変わり目で綴葉装の折(括り)を異にしているとは思えないことから、両筆の関係は補写ではなく寄合書なのではあるまいか。

さらに、この両筆は単なる寄合書ではなく、A 筆部分は定家本、B 筆部分は清輔本と本文の性格を異にしていることが判明する。全巻にわたつて清輔本の勅物の書入れがあり、『新撰和歌集』入集歌であることを示す歌頭の合点を有するなど、一見清輔本であるかのごとき印象を与えながら、実際はこのような性格を持つに至つた経緯は不明である。なお、書入れられた清輔本勅物の筆蹟であるが、確言出来ないが、A 筆部分とB 筆部分では異なるようにも思われる。

また、そうした観点からすれば、前記内題において、卷一―四は、部立を改行して書いているのに対し、巻五―十は、部立を改行せず内題下に書いていて、書式を異にしている理由も明らかになる。

さて、この辺りで本文を検討することとする。

異本歌並びに排列は以下の通りである。

A 筆部分 (卷一—四)

異本歌なく、排列も定家本と全同である。貞応本とその他の諸本が排列を異にする18「かすがの」19「み山には」の二首は貞応本とは異なり、その他の諸本の排列と一致する(新編国歌大観と同一)。

卷一—四において、清輔本は、80ノ次に異本歌1「ゆくみづに」、82ノ次に異本歌2「ゆきとみて」の二首を有する他、排列においても、83 86 84 85 87、154 153と二箇所異なるが、本伝本はそれと異っている。

B 筆部分 (卷五—十)

254 253の排列となる。

307 306の排列となる。

446ノ次、異本歌3あり。

くれのをし^キ

つらゆき

こし時とこひつ、をればゆふぐれのをもかげにのみみえわたるかな

456ノ次、異本歌4あり。

をきの井 みやこべしま

小町
こまち

をきのゐて身をやくよりもわびしきはみやこしま^マべのわかれなりけり

463ノ次、異本歌5あり。

そめどの あはた

あやもち

うきよをばよそめとのみぞのがれ行雲のあはたつ山のふもとに

以上、異本歌並びに排列は清輔本と全同である。ただし、異本歌5の位置については若干問題がある。通常、清輔本は異本歌5を462ノ次に置くからである。しかしながら、顕昭本は異本歌5の位置について、462ノ次、463ノ次の二案を示しており、この相違をもって本伝本の該当部分が清輔本であることを否定するものではない。^(註)

次に字句にわたって検討を加えることとする。

まず、巻頭に書写されている真名序であるが、先に真名序は定家本であると述べたが、A筆部分のうち真名序のみが明確に定家本であると断定出来ない。

元来、真名序に関しては、清輔本と定家本の区別はさほど明確ではない。定家本について言うと、真名序を有するのは、ほ

とんど貞応本のみであるから、それに昭和切を参考に加える程度となる。

清輔本は零本が多い上、永治二年本である宮本家本の真名序は本来のものとは思われず、真名序が初めて加えられた仁平四年本は伝本が存在せず、保元二年本として尊経閣文庫本の真名序が存するにすぎない。

さらに、顕昭本は真名序に関しては清輔本を踏襲せず、多分に定家本寄りの本文を採用している（勿論その当時定家本は成立していない）。

従って、清輔本の真名序本文は確定し難い面が多い。

以上のような不確定な状況のもとで、本伝本の真名序本文を検討した結果は、全体としては定家本系の本文ではないかと思われるものの、定家本であると断定しうる程のものではないという結果になる。

まず、定家本と一致する例としては次のようなものがある。

括弧内は清輔本である。

古今和謔集序 紀淑望（ナシ）

今反謔之作也（今返歌之作也）

長謔短謔旋頭混本之類（長歌短歌換頭混本之類）

古質之語（古質之躰）

其実皆落（其実皆以落）

纒二三人（纒二三人而已）

其躰近俗（其體近俗也）

此外姓氏（此外姓氏）

不用詠和哥（不用倭歌）

悲哉々々（悲哉）

後世知者（定家本「後世被知者」、清輔本「後輩被智者」）

義憤神明也（義通神明也）

其後和謔棄不被採用（定家本「其後和哥棄不被採」、清輔本

「其間和歌棄不被採」）

輕情（雅情）

皆以他才（皆依他才）

不以斯道（不由斯道）

秋津州之外（秋津嶋之外）

名曰古今和謔集（名曰古今集）

四月十五日（四月十八日）

しかし、逆に清輔本と一致する例も存する。以下は逆の例で、

括弧内は定家本である。

逸者其詞楽（逸者其声楽）

但見上古之哥（但見上古哥）

古之天子（古天子）

大友欽^{（朱）}

火友黒主哥（大友黒主之歌）

雖貴兼將相（雖貴兼相將）

野相公（野宰相）

況乎（況哉）

このように本伝本の真名序本文は定家本、清輔本そのいずれにも一致する本文を持つが、全体とすれば、定家本により近い本文を有すると言つてよいのではなからうか。例えば「古今和歌集序 紀淑望」と真名序が内題を有する点、「名曰古今和歌集」「四月十五日」など特徴ある箇所的一致は重視してよいかと思われる。

次に仮名序である。これもA筆部分である。

書写の形式に特徴があり、古注を本行と同じ大きさで二字下げに書き、朱合点（と思われる）を付している。この形式は一見顕昭本かと思わせるものがあり、古注を二行割とする定家本とは明かに異っている。

しかしながら本文が定家本であることには疑いの余地はなく、

真名序のような清輔本寄りの本文は全くない。

次に巻一—四について排列が定家本に一致していることは既に述べたが、字句についても定家本であることに疑いの余地はない。

なお、巻一—四の部分が定家本のうち、いかなる本と一致するかは比較の結果明らかでない。

結局、巻十末に書写された墨滅歌を含め、A筆部分は全て定家本と認めうる。

そこで、次にB筆部分を検討する。

B筆部分が異本歌並びに排列において清輔本と一致することは前述の通りであるが、字句に及ぶと必ずしも単純ではない。清輔本に一致し、定家本と異なる本文も多いが、逆の場合も多い。しかも、少なからずという程度ではなく、かなり多いのである。

ところが、清輔本と異なり定家本と一致する箇所の中に、よく見ると元の本文を擦消し、その上から定家本本文を書いたと思われる例がかなりの数見かけられるのである。勿論、画面が大きいとは言えぬ複写を見てのことであるから確かなことは言えない上、擦消された下の文字は全く読めないから、それが

清輔本系の本文であつた証拠もないが、本文を定家本寄りに改竄していることは疑えない。

ただし、右の改竄したと覚しき箇所を除けば、他は概ね清輔本に一致するかと言うと、これも必ずしもそうとは言えないのである。改竄の痕跡のない箇所でも、清輔本と異なり定家本に一致する例が少なからずある。つまり、本伝本の巻五―十は、清輔本系の本文を有するとは言いながら、もともと定家本本文と混淆した状態にあり、さらに擦消し、改竄によつて定家本寄りの本文になっていると言うことになる。

従つて、本伝本の巻五―十の本文は、本文研究に資するところが少ないと言わざるをえない。以下にそれぞれの例を掲げると止め、詳細な考察を行わない所以である。

まず、定家本に擦消し改竄が行われている疑いのある箇所として次のようなものがある。上段が本伝本、下段が清輔本（一部の伝本のみ本文を含む）である。これらの中には、読みも同じでも、表記を改竄した箇所も含まれる。

- 249 文屋やすひて―ふんやのあさやす、254 もみち葉に―もみちは、257 秋のこのは―あきの山へを、259 山のこの葉の―山のこのはも、269 この哥はいまた殿上―このうたは

またうへ、同 つかうまつれるとなむ―つかうまつりたりけるなり、272 ふきあけのはまの方に―ふきあけのはまに、298

かねみの王―かねみのおほきみ、309 僧正遍昭―僧正へせ

う、314 たつた河―たつた山、317 吉野の山に―ふかきの山

に、336 まかひせは―うつりせは、344 君かちとせの―きみ

かいのちの、345 すむちとり君か御代をは―なくちとりきみ

かみちよを、362 秋くれと―秋なれと、412 つれてこし―む

れてこし、421 きるへきに―きるへきを、433 おもはざるへ

き―うらみさるへき、442 のはなければやこ、にしもくる―

のはなけなるをこ、にしもなく、異本歌4 みやこしまへの―

みやこへしまの、466 そこはしられん―そこはしらなん、468

はをはしめるをはてにて―はをはしめたるをはてにて

一方、改竄の痕跡が複写では認められないにもかかわらず、定家本に一致している箇所として次のようなものがある。

251 哥合しける時によめる―哥合しける時によみける、261

露ももらしを―つゆも、りしを、306 秋のかりいほに―秋の

かりほに、313 たつねもゆかん―たつねもいなん、343 ちよ

にやちよに―ちよにましませ、352 よみてかきける―よみて

かける、356 読侍ける―よめる、369 藤原のきよふ―藤原はら

のきよふん、371 たちなんのちは―たちなん時は、372 まかりけるに―まかりければ、375 ともかうも―ともかくも、379 くだくたひかな―くだくよひかな、380 まかりける人に―まかりける時に、392 みえな、ん―みえぬかな、393 まうてきて―まうてきけるひ、395 いうせん^{（ご）}律師―いう仙、397 まかりいてけるおりに（「お」は「を」を改竄）―まかりけるりに、411 いひけるをき、て―いひけるをうちき、て、416 あまた、ひねぬ―あまた、ひへぬ、422 そほちつ、―そほちては、433 あふひ かつら―かつら あふひ、435 僧正へんせう―僧正へせう、448 からはき―題唐萩、457 いか、さきちる―いか、さきくる、468 僧正聖宝―僧正遍照

改竄の有無は原本の調査によつて変る可能性があらうかと思われるが、いずれにしても改竄箇所が多さと、それとは逆に元來定家本と一致している箇所が多さから、本伝本の本文は問題点が多いと言えよう。

249 次に清輔本と一致する箇所を挙げる。今度は下段は定家本である。

249 これさたのみこの家哥合によめる―これさたのみこのいへの哥合の哥によめる（清輔本）―これさたのみこの家の哥

合のうた（定家本）、253 又は我かとのわさたもいまたかりあけねは―ナシ、256 いし山のてらに―いし山に、262 神の社のあたりに―神のやしろのあたりを、268 ゆひつけて―むすひつけて、273 いたれりけるを―いたれるかたを、282 籠はへりける時に―こもり侍けるに、293 なかれたるかたかけるを―なかれたるかたを（清輔本）―なかれたるかたを―なかけりけるを（定家本）、305 もみちちる―もみちのちる、同 むまひかへて―むまをひかへて、310 よめる―よめりける、313 ぬさにたむけて―ぬさとたむけて、332 これのり―坂上これのり、351 すくる月日は―すすす月日は、356 あつらゑられて―かはりて、巻八部立 別離哥―離別哥、375 すみける人をは―すみける人を、397 きのつらゆきか―ナシ、同 ナシーつらゆき、398 とよめりけるかへしによめる―とよめりける返し、399 あひ物かたりして―ものかたりして、418 あまの川にいたる―あまのかはらにいたる、異本歌4 みやこへしま―みやこしま、同 わひしきは―かなしきは

以上あらましを見たのみであるが、巻五―十の部分は、本来は清輔本の本文を有していたと思われるが、新院御本との校異を示す朱の傍注を失い、勘物も一部しか存在せず、その書式も

通常の形式を保たないなど、かなり改変されていると思われる。和歌一行書というのも、通常の清輔本ならありえないことである。また、本文自体も右に述べたように、清輔本本文を保っている部分と、定家本本文に改められている部分があり、あまつさえ、本伝本において擦消し改竄が行われ、さらに定家本寄りになっている。なお、改竄の時期は複写では判らない。

原本を精査すれば、さらに明らかになることもあるが、以上で本伝本の性質のあらましは判明したと考える。¹³⁾

〔注〕

- (1) 拙著『六条藤家歌学の研究』(平11刊、53頁以下)。
- (2) 本書は井上宗雄氏が某書肆で発見されたものである。家蔵に帰すに当たっては、井上氏の御教示と格別の御配慮を得た。ここに厚く感謝の意を表するものである。
- (3) 厳密に言うくと、保元二年清輔奥書を有する伝本は、尊経閣文庫本と伏見宮旧蔵一本(存巻十一―二十、真名序)の二本のみであるから、この二本により帰納した勅物の特徴に一致する伝本を保元二年本と認定することになる。拙著では、穂久邇文庫本(存仮名序、巻一―十)と金沢

文庫本(存巻一、二)を勅物の一致から保元二年本に加えた。以上四本の特徴と本書を比較の結果、本書を保元二年本と認めることとなる。

- (4) 伊達家本、冷泉家時雨亭叢書第二卷所収の嘉禄二年本、貞応二年本の三本に異同はない。
- (5) 以下取り上げる部分は伏見宮旧蔵顕昭本では欠丁であるので、天理顕昭本が対象となる。
- (6) すでに、浅田徹・五月女肇志両氏編「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成(三)」(国文学研究資料館文献資料部「調査研究報告」22平13・11)に翻刻がある。
- (7) 但し、Dの前にある「両帖之本ノ批第十之奥ノ分」の注記の意味はよくわからない。この奥書の記者(行阿)は「批」を「奥書」もしくは「識語」の意味に用いているらしく、H奥書及びJ奥書中の「批」もそう解する他ない。しかしながら「批」をその意味に用いた例を知らない。後考を俟つ。
- (8) 拙著211―212頁参照。
- (9) 校異の方針五、六において示した貞応本と嘉禄本の本

文の相違や声点注記の方法については、冷泉家時雨亭叢書第二巻『古今和歌集嘉禄二年本古今和歌集貞応二年本』（平6刊）の片桐洋一氏の解題を参考にしている。

(10) 注(9)片桐氏解題。

(11) 拙稿「古今和歌集版本考(続)」(「斯道文庫論集」35平13・2)174頁、「初雁文庫管見」(「国文学研究資料館報」56平13・3)において古今集本文研究の今後の課題として指摘した。

(12) 昭和切もこの歌を463ノ次に置くが、関係あるまい。

(13) 書入れられている清輔本の勅物は、複写が小さく、十分読みえないため、考察の対象から外した。

ただし、勅物の量が少なく、相当省略されていること、片仮名交りで清輔本勅物としては比較的珍しく、その点が永治二年本である宮本家本と同一で、勅物自体も類似している点があることを指摘しておく。また、以上の点から巻五―十部分の本文が宮本家本に類似してはいしないかという疑問が生ずるが、本文の改竄という問題もあるが、特に関連は認められないことを申し添えておく。

(追記)

本稿二の一部を和歌文学会例会(平成十四年十二月二十一日、於星美学園短期大学)において「中世における古今集校合の一例―福井市立図書館本をめぐる―」と題して口頭発表した。その際、諸氏より主として奥書の読み方について種々有益な御教示を賜った。一例として、浅田徹氏よりG及びG'奥書を六条有光息の何人かとし、実孝書写本そのものは焼失し、副本が残り、行阿の用いたのはその副本であるとの見解が示された(本稿はG、G'を有光の再奥書とし、行阿が転写本を実孝書写本と思いつたとの立場をとる)。校了時期の関係もあり、当面本稿の解はそのままとして今後の課題としたい。勿論、本稿の解が唯一のものとは考えていない。しかしながら、終了後、佐々木孝浩氏等より、D'奥書で、寛元四年には徳大寺実孝は出生していないと指摘され、あまりの迂闊さに愕然とした。良い案もないままCとDのように、D'の寛元四年奥書と権中納言実孝の署名とを切り離して考えることとする。但し、これで全てが解決したとは思っていない。

(平成十四年十二月二十五日川上記)